

高遠町原勝間地区団体営土地改良総合整備事業
(小規模排水対策特別)

原 勝 間 遺 跡

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1990.3

高遠町教育委員会

高遠町原勝間地区団体営土地改良総合整備事業
(小規模排水対策特別)

原 勝 間 遺 跡

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1990.3

高遠町教育委員会

序

高遠町では総合計画により、計画的に農地の基盤整備事業を実施してきており、昭和56年度からは勝間地区の農村基盤総合整備事業が実施され、事前に掘遺跡緊急発掘調査がおこなわれています。この報告書は、原勝間地区の団体営土地改良総合整備事業をおこなうにあたり、緊急発掘調査を実施した報告書であります。

この遺跡発掘調査は、土地改良総合整備事業に先だち地区内の約18,000㎡に当たる部分の発掘を実施し、平安時代の遺構である住居址2軒、柱列址3基を発見、別に縄文時代後・晩期の遺物集中地区1箇所を確認した。又、遺物については縄文後・晩期、平安時代のものが数多く出土し、原勝間地区をはじめ高遠町にとりましても、長い貴重な歴史の一片を掘り起こすことができました。

この発掘調査におきましてご指導いただいた長野県教育委員会の先生方、遠路をいわず通っていただいた調査団長の友野良一先生をはじめ調査員の先生方、並びに積極的に作業に参加していただき、なおかつ調査期間中たいへんお世話になった地元の皆さん方に、この報告書の刊行にあたり深く感謝申し上げますと共に、この調査報告書が今後の教育・文化の向上の為に、広く活用されることを願い報告書発刊のことばと致します。

平成2年3月

高遠町教育委員会

教育長 向山幹男

例 言

1. 本報告書は平成元年度に実施した、高遠町原勝間地区団体営土地改良総合整備事業（小規模排水対策特別）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
2. この緊急発掘調査は、高遠町役場の委託により、高遠町教育委員会が実施した。
3. 本報告書は、平成元年度中にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、資料の再検討は後日の機会に譲ることにした。
4. 本報告書の執筆者及び図版製作者は次のとおりである。
 - 本文執筆者 寺平 宏・友野 良一・木下平八郎・矢島 太郎・小松 泰人
小松 博康・小松 節子
 - 図版製作者 寺平 宏・友野 良一・木下平八郎・矢島 太郎・小松 博康
小松 節子・中原美保子
 - 写真撮影 木下平八郎・友野 良一
 - 遺物整理 木下平八郎・小松 節子・中原美保子
5. 本報告書の編集は、主として高遠町教育委員会がおこなった。
6. 遺物及び実測図類は、高遠町教育委員会が保管している。

目 次

序	
例 言	
目 次	
挿図目次	
図版目次	
第 I 章 発掘調査の経緯	1
第 1 節 発掘調査に至るまでの経過	1
第 2 節 調査会の組織	1
第 3 節 発掘調査の経過	2
第 II 章 遺跡の環境	4
第 1 節 遺跡の位置	4
第 2 節 地形及び周辺の遺跡分布	5
第 3 節 原勝間地区の地質及び地形	6
第 4 節 歴史的環境	9
第 III 章 遺構と遺物	15
第 1 節 調査の概要	15
第 2 節 遺構と遺物	16
第 IV 章 まとめ	37
感想文—発掘作業に参加して—	38
あとがき	39
参考文献	40
図 版	41

挿 図 目 次

第1図	原勝間遺跡の位置図	4
第2図	原勝間遺跡の地形及び遺跡分布図	5
第3図	原勝間地質概界図	6
第4図	原勝間遺跡の地質地柱状図	6
第5図	原勝間の地字図	8
第6図	原勝間遺跡遺構配置図	13
第7図	原勝間遺跡遺構図	15
第8図	原勝間遺跡第1号住居址	16
第9図	原勝間遺跡第1号住居址出土遺物拓本	16
第10図	原勝間遺跡第2号住居址、出土土器接合図	17
第11図	原勝間遺跡第2号住居址出土遺物実測図	18
第12図	原勝間遺跡出土柱列図	20
第13図	原勝間遺跡出土柱穴址	21
第14図	原勝間遺跡B地区主要遺物出土図	22
第15図	原勝間遺跡B地区出土遺物拓本	23
第16図	原勝間遺跡B地区出土遺物拓本	24
第17図	原勝間遺跡B地区外出土遺物拓本	25
第18図	原勝間遺跡B地区出土石器実測図	27
第19図	原勝間遺跡B地区出土石器実測図	28
第20図	原勝間遺跡B地区出土石器実測図	29
第21図	原勝間遺跡B地区出土石器実測図	30
第22図	原勝間遺跡遺構外出土石器実測図	31
第23図	原勝間遺跡遺構外出土石器実測図	32
第24図	原勝間遺跡A・B地区内出土石器実測図(1~13B地区、14~16A地区)	33
第25図	原勝間遺跡A・B地区内出土石器実測図	34
第26図	原勝間遺跡A・B地区地層図	35

図 版 目 次

図版1	原勝間遺跡遠景（対岸除組地籍より）	42
図版2	原勝間遺跡遠景（対岸除組地籍より）	43
図版3	原勝間遺跡調査前の近景（遺跡西側より）	44
図版4	原勝間遺跡G-1、G-10、11グリッド調査状況	45
図版5	原勝間遺跡F-1～G-1グリッド西側断面	46
図版6	原勝間遺跡F-4グリッド出土状態、G-10グリッド柱穴址	47
図版7	原勝間遺跡第1号住居址遺物出土状態、第1号住居址	48
図版8	原勝間遺跡第2号住居址遺物出土状態、第2号住居址カマド火床、第1～3号柱列址	49
図版9	原勝間遺跡第1号柱列址検出状態、第1号柱列址	50
図版10	原勝間遺跡G-10、11グリッド土器出土状態	51
図版11	原勝間遺跡G-11、12グリッド土器出土状態、石器出土状態	52
図版12	原勝間遺跡G-11グリッド石器出土状態、遺構外石鏝出土状態	53
図版13	原勝間遺跡第2号住居址出土遺物	54
図版14	原勝間遺跡第2号住居址、G-1グリッド、F-1断面出土遺物	55
図版15	原勝間遺跡G-10、11グリッド出土土器	56
図版16	原勝間遺跡G-10、11グリッド出土土器	57
図版17	原勝間遺跡G-10、11グリッド出土土器	58
図版18	原勝間遺跡G-10、11グリッド出土土器	59
図版19	原勝間遺跡各グリッド出土土器	60
図版20	原勝間遺跡G-10、11グリッド出土土器（使用痕）	61
図版21	勝間出土の尖頭器	62
図版22	守屋貞治作 大聖不動明王	63

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過

昭和63年9月19日に原勝間地区団体営土地改良総合整備事業に係わる埋蔵文化財保護協議をおこない、これを受けて長野県教育委員会より原勝間地区団体営土地改良総合整備事業区域内に、埋蔵文化財包蔵個所があるので事前に調査する必要があり、遺跡調査を委託された場合には受託するよう連絡があった。

文化財担当の教育委員会は、高遠町長より事業要請を受け、原勝間遺跡調査団を編成し業務を遂行することとした。

平成元年4月1日高遠町長と高遠町教育長との間で、調査業務委託の契約を締結。

平成元年4月10日埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁へ提出する。

第 2 節 調査会の組織

○高遠町教育委員会

教育委員長 中原英太郎

委員長代理 岡部善治郎

委 員 北原 作英

“ 横田 雅

教 育 長 向山 幹男

教 育 次 長 伊藤 敏明

係 長 伊藤 清

係 小松 博康

○原勝間遺跡調査団

団 長 友野 良一（日本考古学協会会員）

調 査 員 木下平八郎（東洋陶磁学会会員）

“ 小木曾 清（宮田村）

“ 矢島 太郎（伊那市文化財審議委員）

第3節 発掘調査の経過

- | 月・日 | 日 | 誌 |
|------|---|---|
| 4・10 | | 現場にて10m×10mグリッドを設定する。 |
| 4・11 | | テント設営、資材の搬入をおこなう。 |
| 4・12 | | Am9時30分よりテント横にて鍬入れ式をおこない、発掘調査をG-1グリッドより開始する。土師、須恵、灰釉陶器出土、重機による表土剥ぎ、F-2断面の掘削をおこなう。 |
| 4・13 | | G-1～2グリッド調査、土器集中部分の掘下げ。G-2、F-2断面調査。 |
| 4・14 | | G-1～3グリッド調査、F-1、6重機掘り。G-2グリッドより打石斧を出土。 |
| 4・15 | | G-1～4、F-1グリッド調査、F-1グリッドにて住居址を発見 第1号住居址とする。G-1、2グリッド測図、F-2、3グリッド重機による表土剥ぎ。 |
| 4・17 | | F-1～2グリッド罫敷かけ、F-4、6グリッド重機による表土剥ぎ。 |
| 4・18 | | G-8～11-21グリッド設定、坪掘り、F-4、6グリッド掘下げ、G-4、F-4グリッド測図をおこなう。 |
| 4・19 | | F-4、6グリッド掘下げ。 |
| 4・20 | | F-2～3、6グリッド掘下げ、G-10-22～25グリッド掘り下げ。 |
| 4・21 | | F-1、6グリッド掘下げ、G-10-22～25グリッド掘下げ、G-1グリッド重機による表土剥ぎ。 |
| 4・22 | | F-1～3グリッド掘下げ、G-10-22～25グリッド掘り下げ、G-1グリッド設定、掘り下げ、F-2～6グリッド掘下げをおこなう。 |
| 4・24 | | G-1グリッド断面調査、G-1～4グリッドトレンチ掘り。G-1グリッドに住居址を発見、第2号住居址とする。G-8～11グリッド重機による表土剥ぎ。 |
| 4・25 | | G-1～4グリッド仕上げ、G-7-21～25、G-8-21～25グリッド掘下げ。 |
| 4・26 | | G-7-23、G-9-25、G-10グリッド調査、G-11グリッド一部表土剥ぎ。G-11-21、22グリッド測図、G-9-25グリッドより条痕文、磨消縄文土器片出土。 |
| 4・27 | | 重機によるG-10、11グリッド表土剥ぎ、周辺のグリッド機械掘りをおこなう。前日に引き続きG-7～11グリッド掘り下げ。 |
| 4・28 | | G-10、11グリッドのトレンチ掘り、調査。周辺のグリッド機械掘りをおこなう。 |
| 5・1 | | 発掘調査中間報告会 友野調査団長、木下調査員より原勝間地区の地形、地質、出土遺物についての説明を受ける。出席者20名。 |
| 5・2 | | G-1～11、H-11グリッド調査、遺物出土状態の写真撮影をおこなう。 |
| 5・3 | | G-10～11グリッド調査、H-11グリッドへ調査範囲を拡張する。 |
| 5・8 | | H-11、G-11グリッド調査、H-1グリッド重機による表土剥ぎの後グリッドを設定し、トレンチ掘りをおこなう。柱列の落ち込みを検出する。 |
| 5・9 | | H-11、G-11グリッド調査、H-1グリッド柱列は東西に7箇（柱間約1m）検 |

月・日

日 誌

- 出。G-1-7グリッド地場下第3層より鉢形土器1個体出土。
- 5・10 G-11-11グリッド掘下げ、生活面の検出、H-1グリッド柱列は更に2箇所検出。
- 5・12 H-1グリッド遺物取り上げ、G-10、11グリッド調査をおこなう。
- 5・13 H-1グリッド柱列址調査、実測、G-10、11グリッド調査をおこなう。
- 5・15 第2号住居址の遺物出土状態を測図、遺物の取り上げ、途中で葉壺の蓋片出土、G-10、11グリッド調査、G-11グリッドで打石斧、磨消縄文土器出土。
- 5・16 G-10、11グリッド調査、第2号住居址写真撮影をおこなう。
- 5・17 第2号住居址実測、G-10、11グリッド下層調査、出土遺物の水洗をおこなう。
- 5・18 第1、2号住居址、第1～3号柱列址の実測、柱列址全体写真撮影、G-10、11グリッド下層調査、出土遺物の水洗をおこなう。
- 5・19 第2号住居址遺物取り上げ、測図。G-10、11グリッド下層調査をおこなう。
- 5・20 出土遺物の水洗をおこなう。
- 5・22 G-10、11グリッド下層調査、G-10グリッドより石鏃が出土。第2号住居址の遺物取り上げ、測図をおこなう。
- 5・23 出土遺物の整理作業。
- 5・24 G-10、11グリッド下層調査、第2号住居址の遺物取り上げ作業をおこなう。
- 5・29 G-10～11、H-10～11グリッド調査、測図、西側断面の調査、測図をおこなう。
- 5・30 昨日に引き続きG-10～11、H-10～11グリッドの調査、測図、テント内のかたづけ。
- 5・31 第2号住居址下部ピット測量、テント内のかたづけをおこなう。
- 6・5 テント内のかたづけ、撤去作業をおこなう。
- 7・21 発掘調査報告会 原勝間集会所にてスライド等により説明をおこなう。
- 6～12月 出土品整理作業
- 3 月 報告書刊行

〈発掘調査に参加された方々（順不同）〉

田中 茂男・伊藤 邦弘・伊藤 清・三沢 英彦・名和 長利・小松 泰人・中原 竹男
中原 栄・伊藤 諭・小松 勝美・伊沢美和子・中原美保子・中原やす子・小松やす江
小松 節子・平松 遥・小松二美子・湯沢 浪門・今井 乙二・中原さつき・小松 慶子
牛山 博・北村 勝彦・中原 千振・松下 興業

第 II 章 遺跡の環境

第 1 節 遺跡の位置

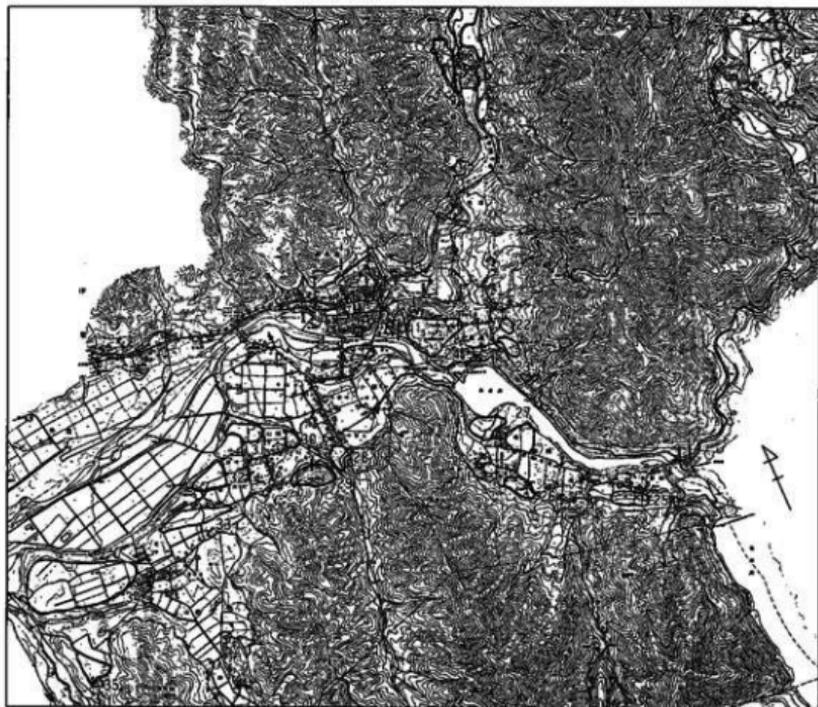
原勝間遺跡は、長野県上伊那郡高遠町大字勝間、原勝間の道上地籍に所在する。高遠町は城下町としてかつて伊那地方の中心地であって、飯田線伊那市駅より杖突街道（主要地方道伊那高遠線）を東上すること約 9 km。遺跡地は、これより三峯川の対岸小原を経て瀬戸地籍から国道 256 号線を東へ向かい、白山トンネルを抜け、高遠湖の南岸に沿って約 1 km 進むと竜勝寺沢（会下谷）に行きあたる。これを右に折れ、町道原勝間本線をさらに東へ竜勝寺沢を越えて進む、JRバス原勝間バス停の南側一帯の水田地帯に原勝間遺跡が所在する。高遠よりこの間約 3.5 km、標高約 800 m を示す。

勝間地区は高遠町の南東部に位置し、南にそびえる三界山を境に南西部を伊那市、南東部を長谷村に接する。又、南アルプスを源とする三峯川が長谷村境の東から北へ流れ、高遠城址公園を有する東高遠地区と隔てられている。



第 1 図 原勝間遺跡の位置図

第2節 地形及び周辺の遺跡分布



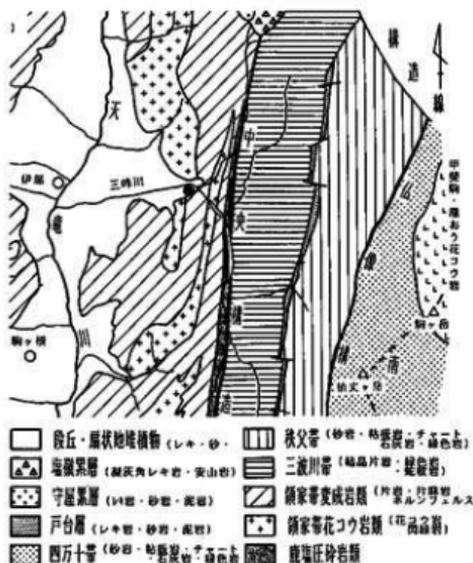
遺跡名	18. 上手垣外	25. 原勝間	31. 北垣外
	20. 原	26. 西勝間	32. 竹垣外
	21. 川 辺	27. 堀	33. 八幡原
	22. 桂泉寺	28. 後 沢	34. 金井原
	23. 花 畑	29. 古 城	35. 越 道
	24. 高遠城跡	30. 上垣外	

第2図 原勝間遺跡の地形及び遺跡分布図

赤石山系と伊那山脈の間を、中央構造線の破碎岩地帯に沿って北流してきた三峯川は、長谷村非持と境を接する高遠町大明神地籍で、金沢峠附近より南流してきた山室川と合流し、直折して伊那山地を分断し、深いV字形の横谷を形成してここから西流する。その直接する地点の南側、左岸に沿って東西に長く帯状する極く狭隘な小扇状地形の段丘上に勝間部落が広がり、会下谷（竜勝寺沢）によって原勝間と西勝間に分けられる。原勝間遺跡はこの東端に位置する。

西勝間にはすでに発掘調査を終了し、保存されている堀遺跡があり太古より歴史のある一帯である。

第3節 原勝間地区の地質及び地形



第3図 原勝間地質概界図



第4図 原勝間遊跡の地質柱状図

1. 地質

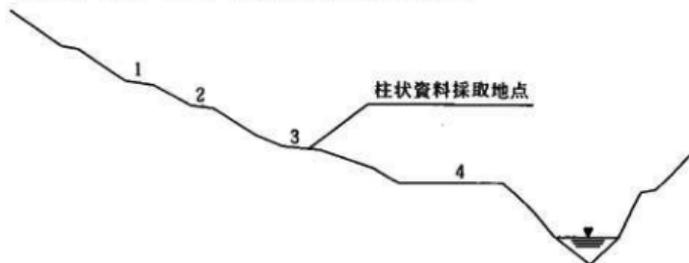
調査地区の南側の山地……傾家帯の勝間花崗岩・非持石英閃緑岩

勝間花崗岩は……中粒の黒雲母角閃石・石英閃緑岩、主要鉱物は斜長石・石英・普通角閃石・黒雲母など。

非持石英閃緑岩は……中粒の石英閃緑岩の組成をもつ岩石で強い片理をもつ、片理は中央構造線に近い程強く、縞状構造をつくることができる。中央構造線に隣接した部分では、石英・黒雲母が細粒化し、斜長石などの斑状結晶が発達して、いわゆるリポーフィロイド様岩になっている。この岩石は従来「鹿塩片麻岩」と呼ばれてきたものである。

主要鉱物……斜長石・石英・黒雲母・緑色普通角閃石などである。

2. 地形



◎この地域の地形断面を模式的に示すと、上図のようになる。但し、1面は部分的に残されているのみで、1・2面は連続していない。多くの場合、2面は山地と接して最上段の面となっている。

◎断面模式図のように、4段の河岸段丘面に区分される。1面は三峯川の旧河床面（扇状地面）で、2・3・4面は三峯川の侵蝕による河岸段丘である。

＜1面＞ ◎三峯川水系の円礫が堆積し、その面上に白色粘土化したテフラがある。テフラは鉱物組成からみて、御岳第1軽石である。

◎1面が形成された年代は、Pm-1が降下した約8万年前よりも以前である。

＜2面＞ ◎1面を三峯川が侵蝕して生じた河岸段丘面である。この面上には新期御岳火山灰と始良Tn火山灰がある。

・新期御岳火山灰は、かなりあざやかな磁鉄鋼やシソ輝石の結晶。長石が多く、石英や黒雲母は少ない。

・始良Tn火山灰は、バブル型の火山ガラスを多量に含む、褐色のガラスはない。

面の形成年代はPm-IV降下後で、しかも新期火山灰降下以前の約3～4万年前である。

＜3面＞ ◎2面を再び三峯川が侵蝕して生じた段丘面である。この面上には下部から黄褐色土約60cm、その上位に黒色土と灰黒色土が層状に約120cm堆積している。

・これらの堆積物に含まれる鉱物は風化した黒雲母、石英が圧倒的に多く、石英粒には黒雲母をとりこんでいるものも目立つ。これらの鉱物は南側の山地に分布する。非持石英閃緑岩や勝間花崗岩が風化して生じたものであり、それらが近くの

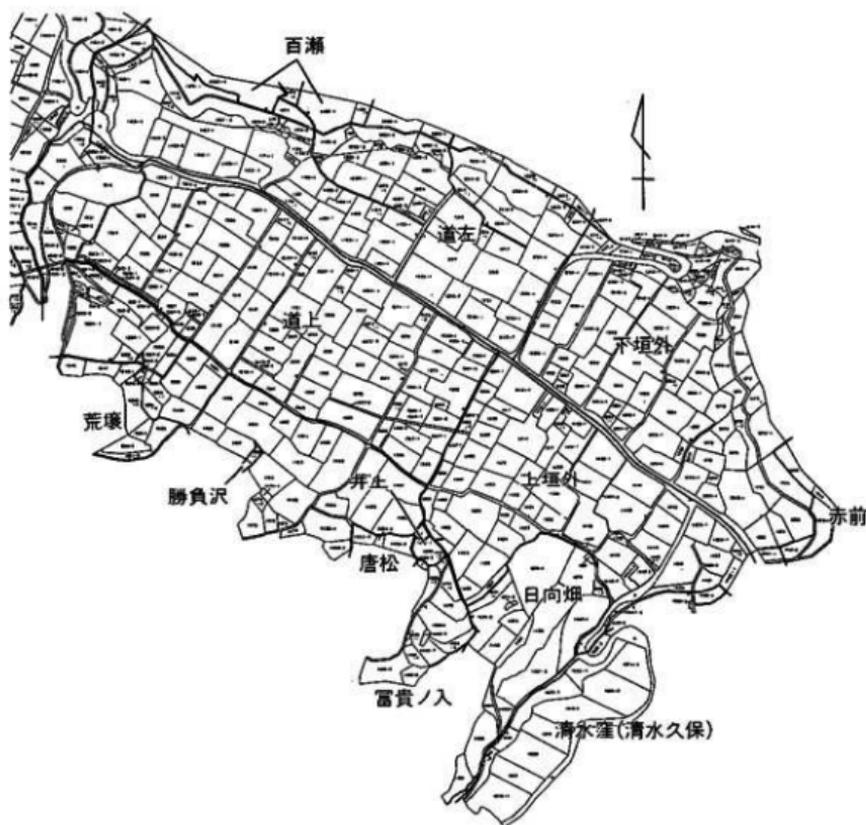
沢から流されてきたものと思われる。黒雲母・石英の他には磁鉄鉱・シソ輝石・角閃石などの結晶とバブル型の火山ガラスがわずかに含まれている。これらの鉱物は御岳新期火山灰や始良Tn火山灰のものと思われるが、一次的な風成の堆積物ではなく、おそらく上段の2面に堆積していたものが雨水や風によって運ばれ、混入したものと考えられる。

面の形成年代は御岳火山灰の活動終了後、また始良Tn火山降下以後の約2万年前以後であろう。

〈4面〉 3面を三峯川が侵蝕して生じた段丘面である。

面の形成期は、約1万年以降と考えられる。(面上の堆積物の調査が必要)

(寺平 宏)



第5図 原勝間の地字図

第4節 歴史的環境

1. 勝間の自然的立地条件と歴史

1. 高遠町勝間発見の尖頭器 (図版21)

勝間出土と伝えられる尖頭器は(唐沢貞次郎旧蔵)現在所在不明である。尖頭器の大きさは全長15cm、幅4cm、器厚7mm、頁岩製。この尖頭器の形態は葉状の薄手のもので、調整は薄く整った割釦を丹念にくり返されている。また、全縁辺の刃部は並列し調整痕はきわめて整った技法で優れた石器である。

2. 勝間の歴史

勝間の歴史を考える場合に自然的な立地条件を除いては論ずることは考えられないほど重要な項目である。この勝間部落を大観してみると、東の赤石山脈に源を発する三峰川と山室川の合流する地点に接した位置に当たっている。この勝間はこれらの自然に大きく支配されて今日に至っている。従って、これらの自然的現象を科学的に究明することは郷里を再考する重要なことと考えられるのである。

3. 三峰川

三峰川の上流は第三紀の造山活動により海底が隆起して出来た褶曲山脈と呼ばれている。この第三紀層に添って中央構造線の東側は水成岩で三波川層・御荷鉢層・中生層(介在)・古成層の順に規則正しく、南北に向かって帯状に露出しており、構造線の西側は火成岩の鹿塩片岩・眠球片麻岩が露出し、更にこれに接続し、黒雲母岩(水成岩)の中に閃緑岩・花崗岩・正片麻岩(火成岩)を介在させている。従って三峰川の流域には岩石の種類が極めて多い。

4. 三峰川の名称

次に三峰川の名称であるが、何時の頃から三峰川と呼ばれるようになったかは明らかでないが、文献によると正保年間(1644年頃)の図絵図(信州高遠絵図)には「二峰川」とあり、鳥居氏の支配時代寛文年間(1661年頃)と推定される高遠絵図には「二部川」と記されている。元禄年間(1688年頃)の信州高遠絵図には「三峰川」となっている。また、安永8年(1779年)編の「木の下蔭」には城南(高遠城)を流れる荒川を三峰という。(源は駿遠信の三つに連なる岳の領より落つるうえ名づく、山河川にては大河と言うべし、水清くして流れ早く末は天竜川へ落つる。城下のうちにあっても、上にては勝間川と言ひ、下にては弁財天川と言ふ)とある。これらの記録は江戸時代からのもので、それ以前の古い時代にあってはどうか呼ばれていたか明らかでない。

5. 三峰川と森林

三峰川の奥地は千古不伐の大森林地帯であり、その森林地帯から注ぐ三峰川は、何万年もの間に多くの谷や扇状地を各所に形成していった。勝間もその一つである。この大森林地帯の伐採は、中世頃から始まったと考えられるが記録はない。近世になると木材を多く伐り出した記録が見える。日下部新一氏の「天竜川筏考」によると、延宝7年(1679年)には筏数4755と記しており、また、元禄3年(1690年)には4113と記されている。こうしたことから三峰川は水源としても大変貴重な存在であるが、またこの一方森林資源として人々の生きてゆくうえに大きな経済的役

割を果たしてきたことも事実である。しかし、森林の伐採も過ぎると災害をもたらすものになる。幕府は正徳二年(1712年)ついに濫伐禁止令を出したが時すでに遅く濫伐の結果は、三峰川にかかわる氾濫源をますます拡大していった。

6. 地質調査結果

今回の調査では考古学的成果はさることながら、寺平宏先生によって行なわれた地質調査の結果、原勝間遺跡の上段にある遊園と呼ばれる運動場からP.1(御岳火山)8万年前の火山原が確認されたことである。このことは、この運動場の下段に三峰川の礫層が堆積している層があることより、三峰川は、この地点から8万年かかって現在の勝間を流れている三峰川の河床迄降下していったことを証明してくれた。このことは勝間の成立を科学的に証明してくれる貴重な研究となった。

7. 勝間の台地

勝間は南に三界山を主峰として、城山竜勝寺・五郎山・白山が並んでいる。これらの山々と三峰川とに挟まれた河岸台地が勝間部落である。この勝間部落は前述の山々より流れ出る小山水・ヶヶ谷・宮ノ入・熊の川などの小河川によって、勝間台地を更に幾つかの小扇状地として形成していった。こうして成立した勝間台地に、現在まで知られたところでは旧石器時代約一万三千～四千年前の旧石器編年のV期に比定される尖頭器が発見されたのである。このことにより勝間には、旧石器時代にすでに人類の生活の場があったことになる。縄文時代の何千年間の長い間には、各時代にわたって縄文人が住居したのではなく、その間には空白時代があった。現在解っているところでは縄文時代中期・後期・晩期とは続いていることが研究で知ることができたが、縄文時代中期以前はまだ発見されていないのが現状である。縄文時代晩期以降弥生時代前期からは古墳時代・奈良時代・平安時代と続いて集落が存続したものと考えられる。古い寺や堂はおそらく平安末期頃から中世にかけて設けられていったものと考えられる。こうして勝間の古い歴史を探すことは、我郷土勝間の古里創生につながるものであると考える。

(小松 泰人)

2. 勝間の来歴と石造物

1. 来歴のあらまし

勝間地域には堀・西勝間・原勝間の3遺跡が存在する。(昭和30年代全国調査により遺跡台帳に登載)歴史時代に入って勝間をみると、古代に白山社勧請、中世に竜勝寺開山、武田織田戦、高遠城落城時の死者のまつり(五郎山)、近世に木地師墓建立、高遠焼元祖として勝間河原築窯の経過があった。支配状況は、鎌倉期は諏訪上下社領、南北朝は宗良親王、その後の中世は、藤沢氏、高遠氏であった。名称としての勝間は「葛麻」からきているといわれる。勝間では葛と麻が特産品で、平安期の献上品であったと推定されている。現在の部落(地名)は東から原勝間(30戸)滝沢(20戸)共信(14戸)西和手(15戸)堀(15戸)の5区97戸となっている。地形的に竜勝寺沢が地域を2つに分け、滝沢以西は西勝間と呼ぶ。勝間全体の北面する傾斜地には近世以来の上井・中井・下井の田用水が西流し、特に上井の管理については区民の並々ならぬ苦難の跡がみられ、安政期西勝間では15町歩の開田をみている。

2. 原勝間の地名

高遠町教委では、「身近な郷土の地名を究明しそれを手がかりとしてわが郷土の過去の姿を知り、その発展の過程の一端を思い知ることが出来れば」として「高遠の小字名」を編集した。このうち大字勝間をみると、「峠下白山社」から「矢沢」まで48の小字名が数えられる。そのうち原勝間地域の地名・小字名は次のとおり。

会下谷(竜勝寺沢)・富士塚・道左・百瀬・下垣外・道上・上垣外・日向畑・富貴ノ入・厩松・井ノ上・井ノ端・古瀬・蟻塚・舟久保・荒城(荒塚)・勝負ノ沢・狐久保・姥ヶ入・桃ノ久保・板取沢・小山沢・清水ノ窪・高畑・清水ノ久保・赤前・牛木林・大久保・四ツ谷・中尾・矢沢・柿ノ木畑

凡そ30と地名は多いがこれは広い山林を含んでいるからである。地名は伊那地方に一般にあるものが多く、狐久保等くぼ(久保・窪)のつくものは、くぼみとっているように地形地名であり、中世の検地帳に既に出ている「沢」「谷」のつくものも地形地名で「松」「桃」のつくものは樹木地名である。原勝間には「上垣外」「下垣外」が広汎に存在し、集落に接した耕地がこの名称となっている。「富士塚」「蟻塚」等の塚の名称があるが、古墳・墓に係るものであろう。

ここに、一覧の小字名には入っていないが、注目すべき地名がある。これは発掘調査中に土地所有者から聞いた「やくめん」の名称である。場所は発掘した原勝間遺跡のほぼ中心の田数枚であり、漢字をあてれば「役免」であろう。「免」という語は鎌倉期や室町期の頃は、領主等から年貢を免除されたり、減じられた田畑のことをいっていた。幕政期には「免田」といい「免」のつく地名は伊那ばかりでなく全国的に分布する。ほかでは「蚕免」「二斗免」「仏免」等がある。遺跡に近く「新屋敷」「殿村」(或は殿倉)の呼名があり、ここは西勝間方面より古い土地柄という観点に立てば、居館址とも考えられるが推定の域を出ない。「才の神」の名は村はずれの位置を表わしている。原勝間の東と西のはずれに「城」のつく地名がある。東は「下垣外」の一部にある「古城」で、三峯川断崖上の鼻で、狼烟台跡と伝えられており、西は

山つきの「荒城」であり、地名の上から中近世の姿を物語っているとしよう。今回の調査をまっただでもなく、原勝間には縄文後・晩期を主に平安期に至る遺物包蔵地が散在し、耕作の際に住居址がみつき、広範囲から石器・土器が出て、精査されないまま遺物は拾われている。

3. 石造物の分布

勝間地域の石造物は、庚申塔・馬頭観音・念仏塔等普通の状況であるが、古刹竜勝寺があるだけにその参道・境内には数が多い。参道に享保12年の聖観音像、薬師堂に十王仏12体があるが、原勝間の主な石造物をあげてみる。

火の見のそばに文字の「寒念仏供養塔」が建つ。昔、寒中の夜に鉦をたたき念仏を唱えながら歩き、主に女性が行ったものであろう。念仏塔は西勝間にも二体ある。集落の真中「殿倉」の辻に「秋葉山大権言金毘羅大権言」の併記碑が建つ。姿のよい自然石を使い、字・彫ともによく、碑陰には願主・連中・建立年がある。原勝間に続く長谷村溝口にも同じ併記碑があり、大鹿街道を結ぶ信仰の一連性を思わせる。秋葉山はあきばさま、あきやさまと呼ばれ、火伏せの神として馴染深く、静岡県春野町に秋葉寺がある。箕輪の松島生れといわれる三尺坊は火を治める行者として庶民の尊崇をあつめ、その講は秋葉塔建立、代参の習わしとなった。金毘羅様は香川県琴平町に鎮座し、農業殖産の神、海の守護神として広く信仰をあつめた。原勝間の寒念仏塔・秋葉金毘羅塔は今後、由来調査が必要であろう。

次に地名ではないが、「金山様」^{やがら}について述べよう。集落東部の遊園地に、金山様があり、昔子供達が天神様を祭る行事をしたということである。金山様は鍛冶屋の神様であり、原勝間には鍛冶屋はなく、或は三峯川を隔てた非持に関わっていないかと思うのであるが、これも全くの推測である。

4. 守屋貞治の不動明王(図版22)

貞治(明和2年～天保3年、1765～1832)は長藤壇供生まれの石仏師で県内外に作品を遺している。甲州が一番多く、上伊那・諏訪・木曾・江戸・上州・勢州・三河・播磨・松本・相州の順となっている。333体を念仏を唱えながら作ったといわれるが、勝間の不動明王は最高傑作の一つと評されている。高遠座の青石を使い、丹念に仕上げ、うつ向加減で沈思黙考の忿怒相をしている。「大聖不動大明王」として高遠町の有形文化財に指定されている。安置する場所は、常盤橋の勝間側のやや高い所で、格好な場所である。

5. 遺跡から信仰・祭祀へ

今回の調査は農地に対する小規模排水対策特別事業7ha施行に先だって行われた。調査は約1.8haで「方」の文字が入った墨書土器の発見、平安期の住居址を明らかにする等貴重な発見があり、この古事実が連続と中近世を経て現代に継がり、歴史を物語る地名、民俗の由来を語る石造物となって現存しているのである。原勝間の西寄りに石造の二本立が建つ。これには半みち程西にある白山社の祭礼に、西勝間と共に織が立つ。神社は現石川県の白山より鉾持神社への勧請を経て久安5年現在地(共信)へ遷宮し、広い境内をもっていた。なお白山社は伊那の東部では勝間白山社だけである。ついでであるが、小原峠の下に布引岩という大岩があり、布をさらしたような白い筋がある。座頭岩とも呼ばれ伝説が残っている。

(矢島太郎)

第6図 原勝間遺跡遺構配置図

A地区：F-1-6, G-イ-3, H-1 グリッド
B地区：G-7-11, H-10, 11グリッド

0 10 20 30 40 50M





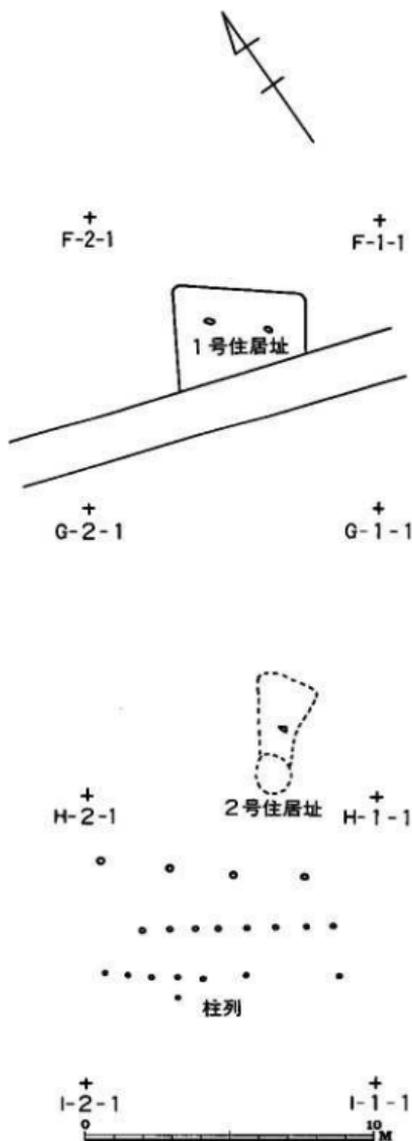
第 III 章 遺構と遺物

第 1 節 調査の概要

今回の調査は、原勝間地区（高遠町教育委員会が作成した遺跡分布図による）の区域内、東西200m、南北90mの18,000㎡にわたり、グリッドを設定し調査を行った。

調査の結果、遺構は平安時代の住居址2軒、平安時代の柱列址3基、縄文時代後期・晩期の遺物集中地区1箇所を確認することができた。

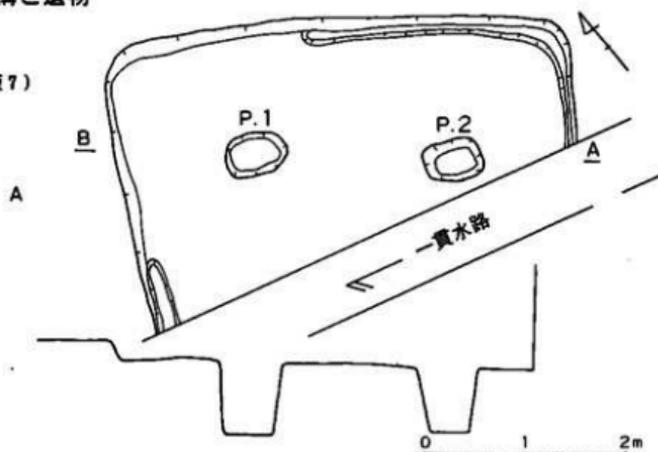
遺物は、縄文後期・縄文晩期・平安時代の遺物を検出することができた。



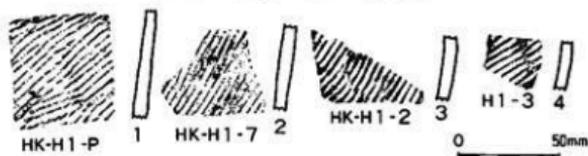
第 7 図 原勝間遺跡遺構図

第2節 遺構と遺物

第1号住居址 (第8図、図版7)



第8図 原勝間遺跡第1号住居址



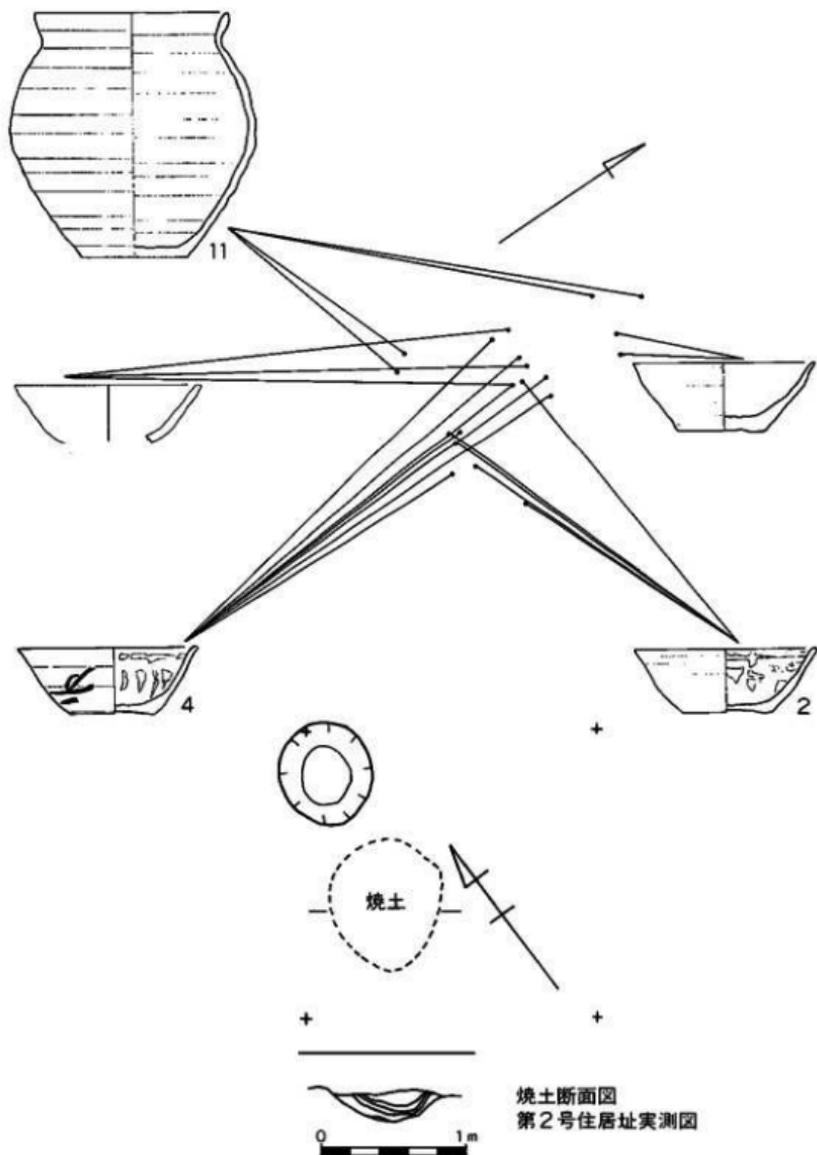
第9図 原勝間遺跡第1号住居址出土遺物拓本

本址は、グリッドF1に検出された住居址で、西約10mに第2号住居址がある。プランは水田造成時に一貫水路を通す為に破壊されており西側は不明であり、残存する遺構より推定すると一辺4.6mを測る方形の住居址である。現存する掘り込みは東西北共に10cm前後で、床面はほぼ平坦であるが砂まじりの黒緑色土層中に作られており余りよくない。主柱穴はP1、P2の2箇所検出された。P1・P2共60×40cmの楕円型で掘り込みは35cmである。他は不明であるが4本と考えられる。周溝は北壁中央より東壁隅を通り西側に伸びる、東側隅より1m西の位置に一貫水路がありそれから先は不明であるが、西壁中央直下に長さ60cm残存する周溝に続くものと思われる。北隅より東と南方向へ共に2mの間はなくそのほかは壁直下を巡るものと考えられ、巾、深さ共に10cm前後を測る。遺物は少ない。須恵器片5点が床面から10cm前後浮いた状態で出土した。本址に伴うかまどは一貫水路の反対側を調査したが検出できなかった。

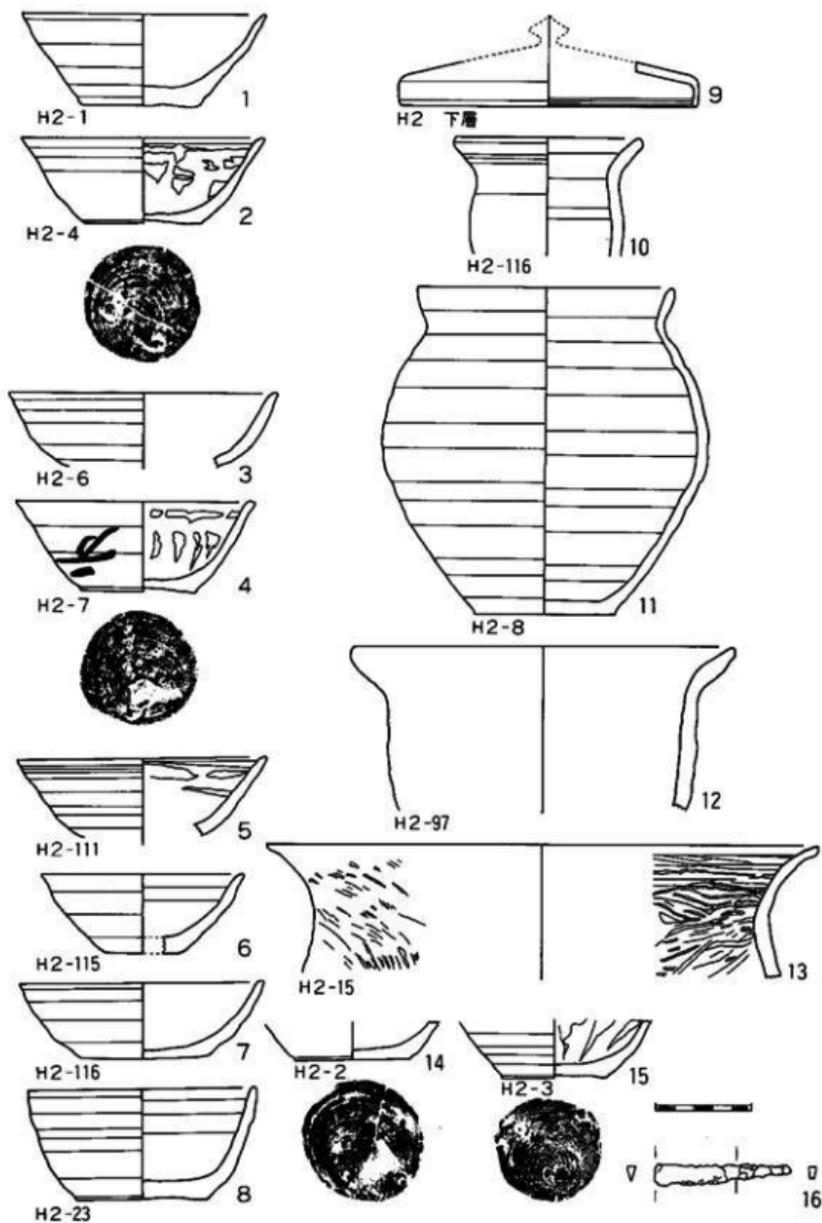
遺物 (第9図、図版14)

遺物はすべて須恵器のかめで胴部の破片5点が出土した。器型復元できるものはない。表面に斜状の叩き目があり、裏面はなで調整痕が残る。(第9図の3)の4裏面に非常に浅い青海波の打痕がある。本址の所属する時期は10世紀初頭前後と考えられる。(木下平八郎)

第2号住居址(第10图、图版8)



第10图 原野間遺跡第2号住居址、出土土器接合图



第11图 原勝間遺跡第2号住居址出土文物实测图

本址は、グリッドG-1の両側に検出された住居址である。プランは水田造成時に破壊されて不明である。床面は水田の地場と同一面上にあり、一部に焼土が残っており断面を観察するとレンズ状をしておりかまどの火床と認められた。かまどの構築状態、壁の状態、柱穴等は残存しておらず不明である。遺物の出土は2m×2mグリッド2箇所の水田の地場広内に残存しており、細かく割れた状態で多量に出土した。

遺物（第10、11図、図版8.13.14）

土器は、杯、かめ、短頸壺の蓋、刀子である。器型復元できるものが多い。杯は多く30簡体以上になり、杯（第10、11図4・図版13-1.2）は墨書があり「方」と読める。他に杯の外側に墨書のあるものが4点（図版13-7）あるが1部のみで判読できない。蓋（第11図9）は灰釉で外縁の1部で塗布産である。かめは、第11図10～13の4箇の他に復元不可能なものが5箇ある。刀子（第11図16）は刃部の中央から折れている。（木下平八郎）

第1号柱列址（第12図、図版8.9）

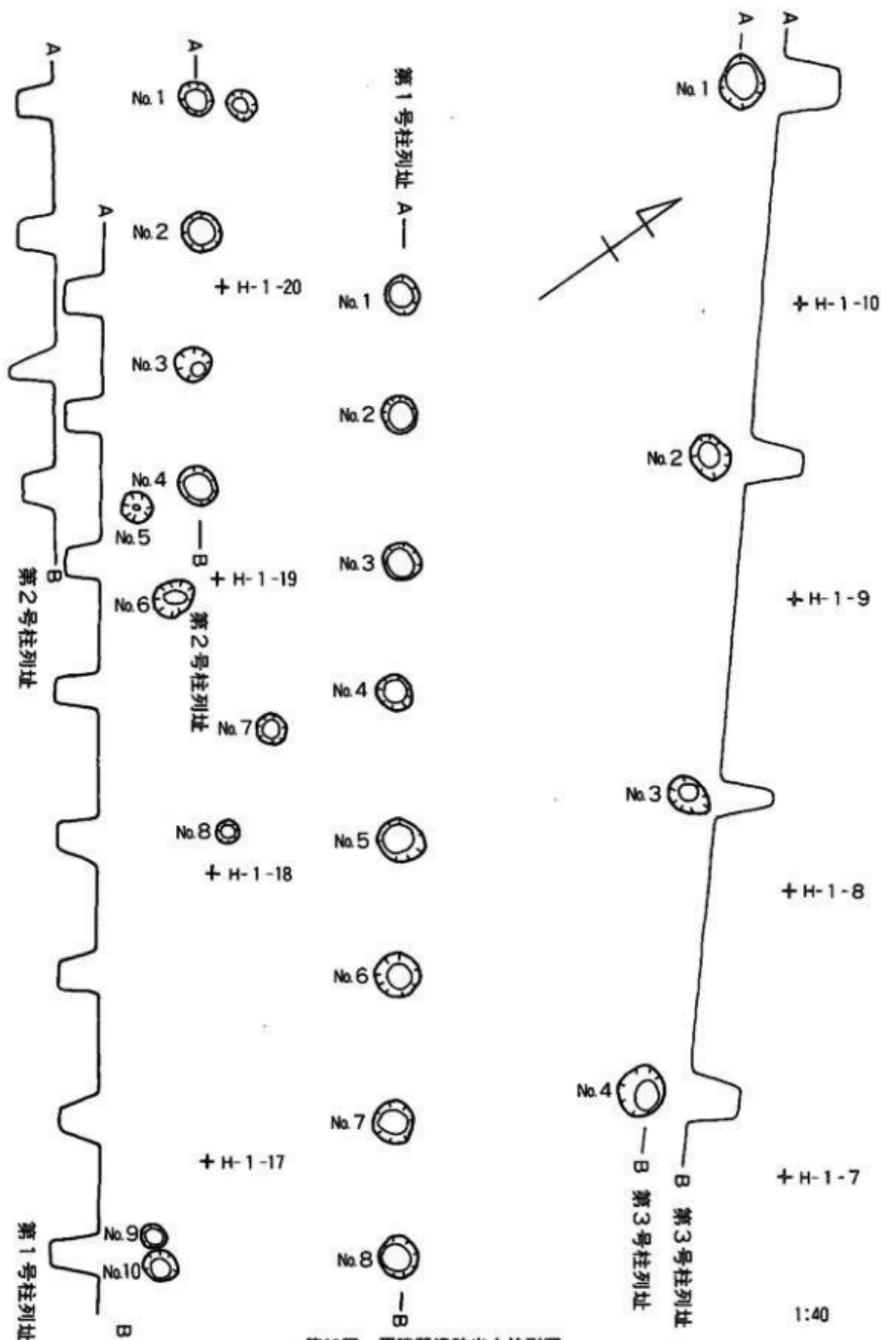
本址は、グリッドH-1からH-2に検出された柱列址である。東西方向に8箇のピットが検出された。上場の径が25cmから30cm前後で、底径は20cm前後、掘り込みは10cmから15cmと浅い。上場が水田の地場になっており造成時に南から北方向に削り取られたために浅くなったと考えられる。柱間は70cm前後あり、7mの直線上に並ぶ。No.8より東方向は高さ1.5m上を農道が通っており調査ができなかった。遺物の出土は無い。

第2号柱列址（第12図、図版8）

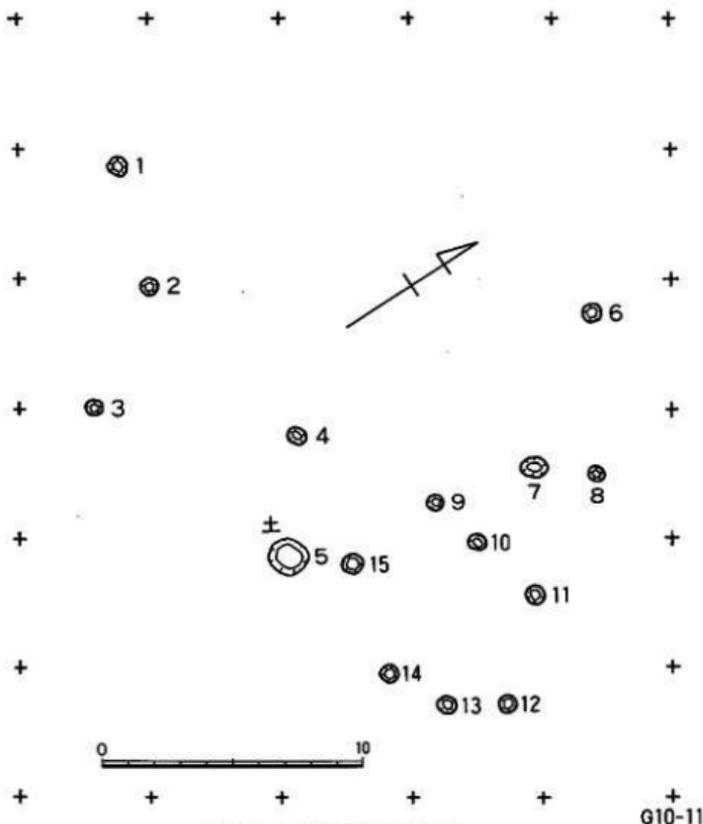
本址は、グリッドH-1からH-2にかけて検出された。第1号柱列址の南西1.3mの位置に4箇が直線上にある。上場の径は25cm前後、底径はNo.3の他は18cm前後、掘り込みは10cmから15cmと浅い。第1号柱列址と同様に上場が水田の地場上にあり削り取られた可能性が高い。柱間は70cm前後あり、東西方向に3m第1柱列址と並行して並ぶ。遺物の出土は無い。他に南東方向にピットNo.5からNo.10があるが、どのようなピットか不明である。

第3号柱列址（第12図、図版8）

本址は、グリッドH-1の7から10にかけて検出された。第1号柱列址のNo.2よりNo.2が北東2m、第1柱列址のNo.7より北東1.5mにNo.4がある。第1、第2によりやや北にひらく位置にある。上場の径は30cm前後、底径はNo.3が12cm、No.1が25cmあり、掘り込みは18cm前後ある。柱間はNo.1とNo.2の間が2.2m、No.3とNo.4の間は1.8mを測る。東西方向7.5mの直線上に4箇のピットが並ぶ。本址は、第1、第2柱列址に比べピットの径、柱間の規模が大きく建物址と考えられるが、これに相対するピットの検出がなく用途は不明である。本址に伴う遺物は無い。第1、第2、第3号柱列址の所属する時期は、北東に所在する第2号住居址の時期よりみて10世紀初頭前後のものであろう。（木下平八郎）



第12图 原勝岡遺跡出土柱列圖

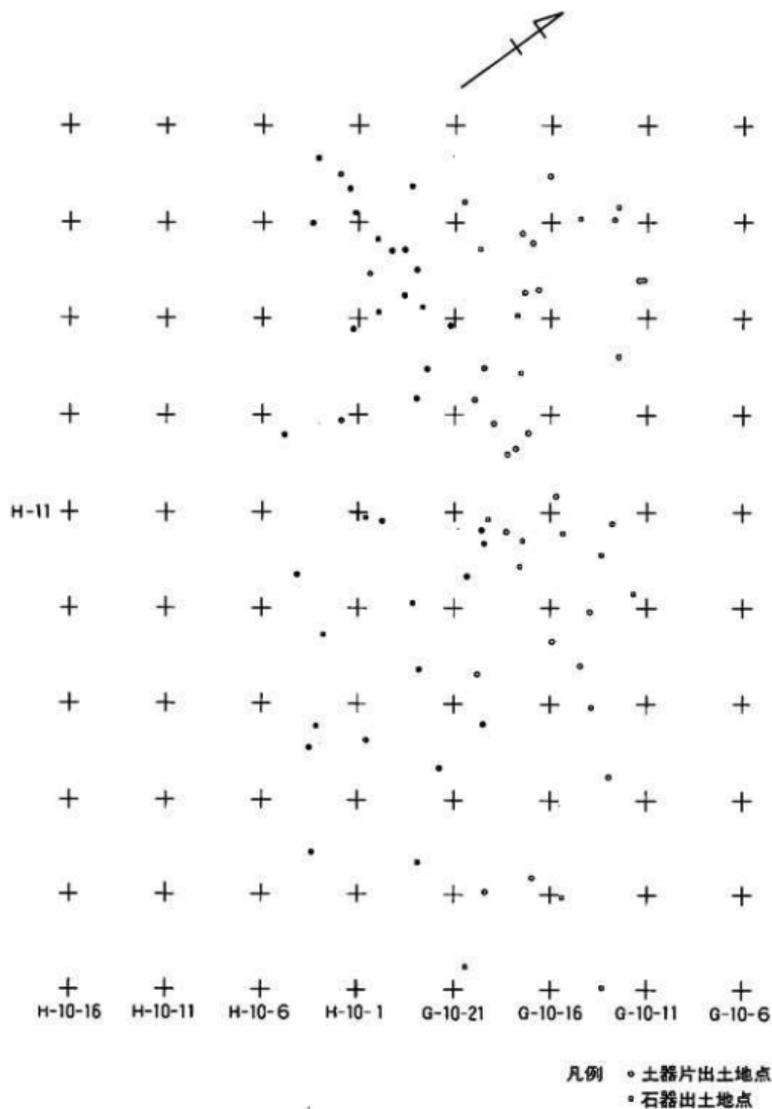


第13図 原勝間遺跡出土柱穴址

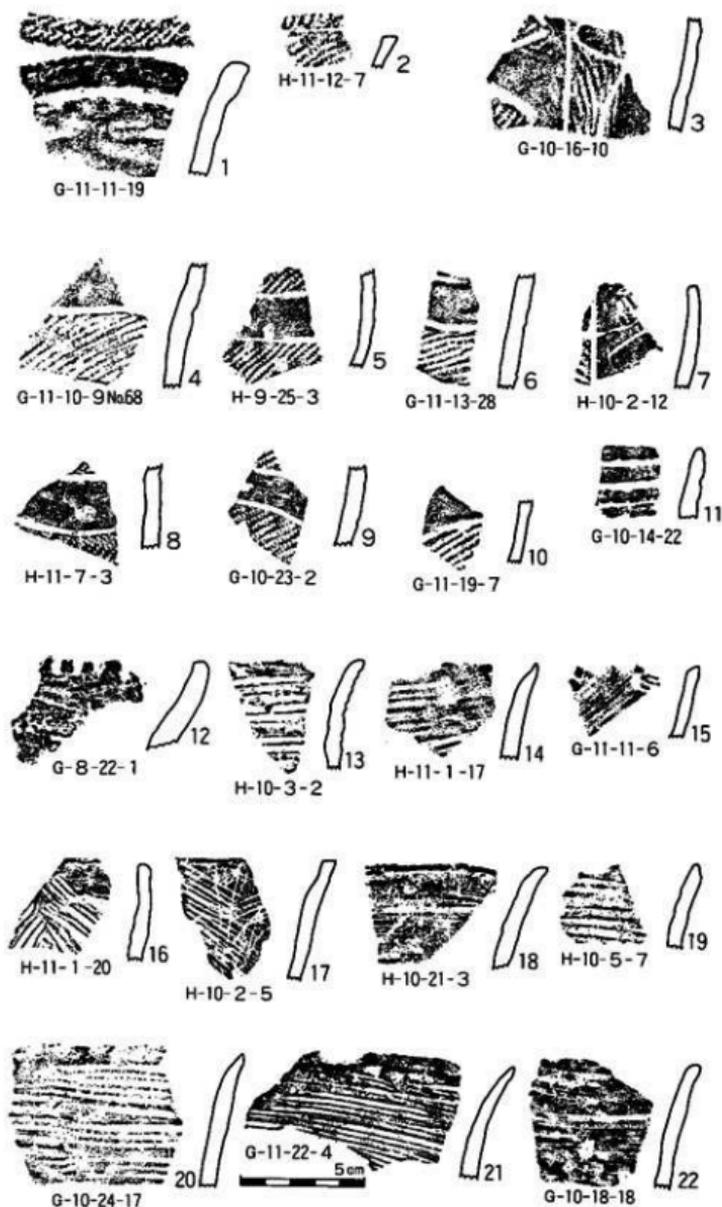
柱穴址(第13図、図版6) 縄文土器出土土坑(第25図-1、図版10-2、15-1)

本址は、G、H-10、11に検出された柱穴址である。1.2.3は水田造成に南西部を削られ失なわれて3箇所しか検出できなかった。径30cm前後、深さ10cm前後である。現存する型態よりみて円型となると考えられる。5は径60cm、深さ20cmで第25図の1の縄文土器がG-10-22グリッド西隅の砂質褐色土層を掘り込んだ土坑の中に横転して検出された。水田地場上面より上に出ていた部分は造成時に削られ紛失した可能性がある。口径25.5cm、高さ現存部分25cm、口径部は小さい波状となり、等間隔に4箇の小さな山が作られており、3箇の穴がつけられ巾4mm前後の沈線が口径の5mm下を巡る。頸部を隆帯にきざみ目を入れた帯が1周する。肩より胴下半部にかけて磨消縄文が付けられる。焼成は良好である。9-15はほぼ楕円型となるもので建物址と考えられるが炉址、煨土の検出はない。6.7.8は不明である。

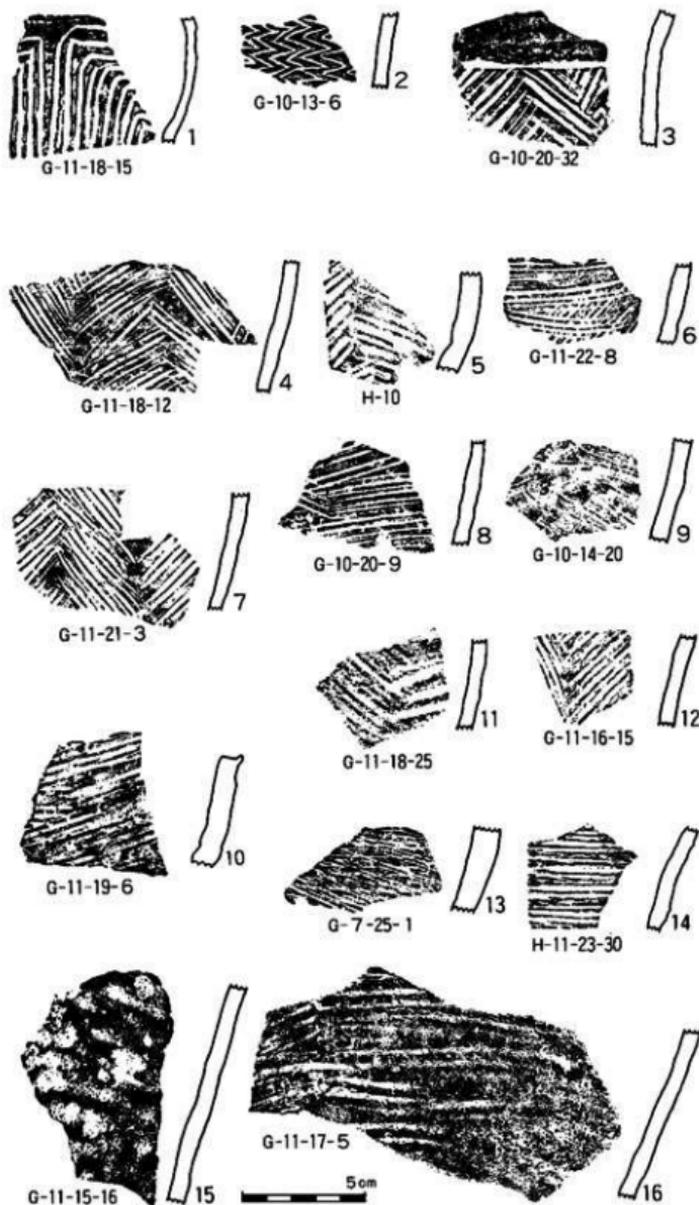
(木下平八郎)



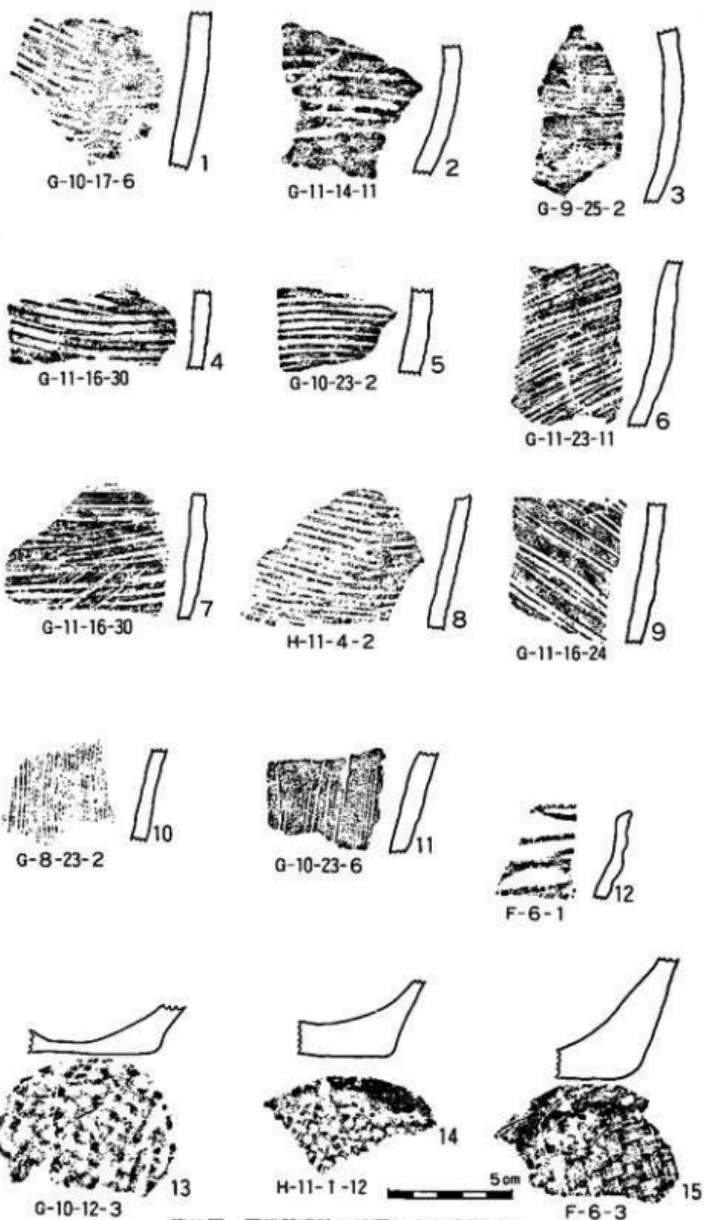
第14图 原勝間遺跡B地区主要遺物出土图



第15図 原勝間遺跡B地区出土遺物拓本



第16図 原勝間遺跡B地区出土遺物拓本



第17图 原勝間遺跡B地区外出土遺物拓本

B地区出土遺物拓本（第15図、図版10.11.15.16.17）

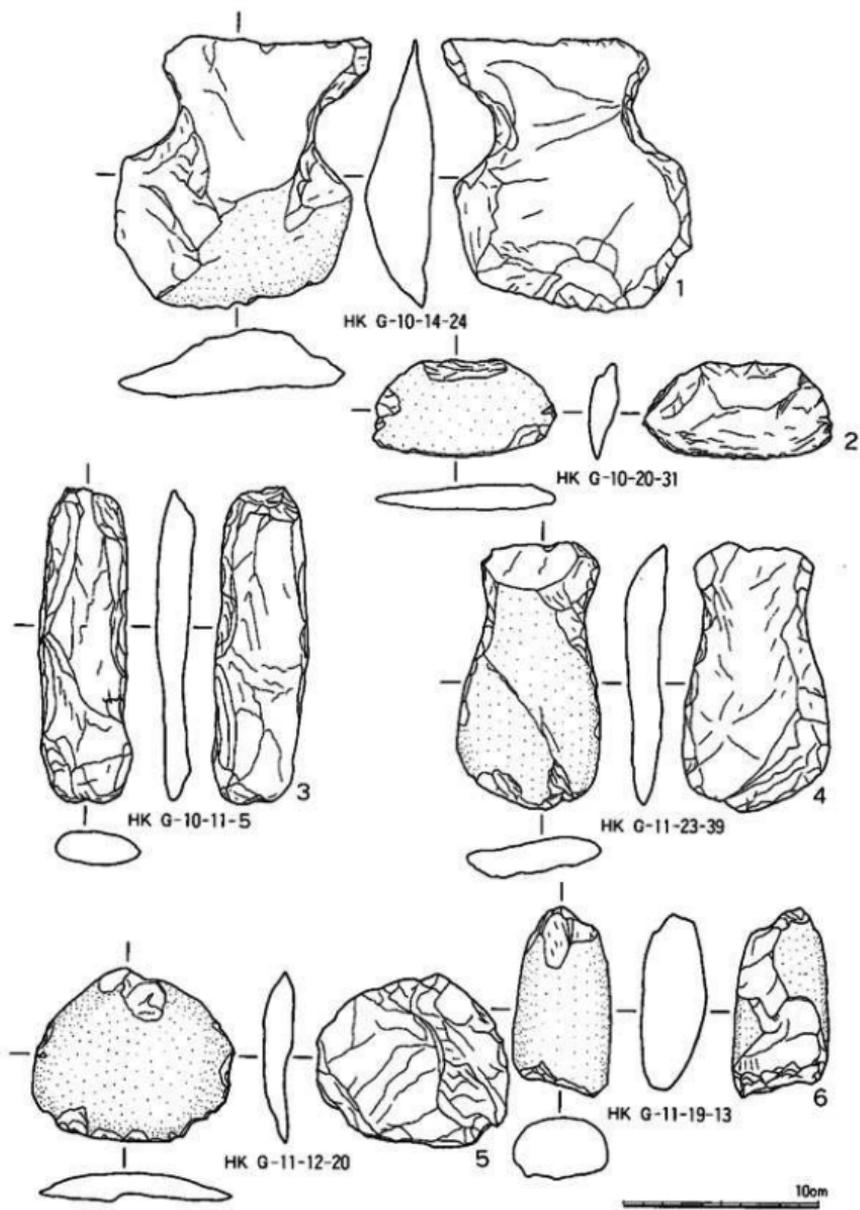
出土土器1は無文の折返口縁部の土器片で、口唇に斜縄文が施された縄文後期後半の土器。2は器面と口唇に縄文が施された器厚の薄い縄文後期後半の土器。3～10は胎土に長石粒や白雲母が含まれやや薄手の磨消文が施された縄文後期末の土器である。11は横位に7mm巾の沈線の区画文が施された縄文後期末と思われる深鉢形土器の口縁部。12は粗製の無文土器で、口唇に刻目が施された深鉢形の縄文晩期の土器。13～22は器厚が5～6mmで胎土は長石などの混入物の少ない精選された焼成の良好な縄文晩期の条痕文土器である。

B地区出土遺物拓本（第16図、図版10.11.15.16.17）

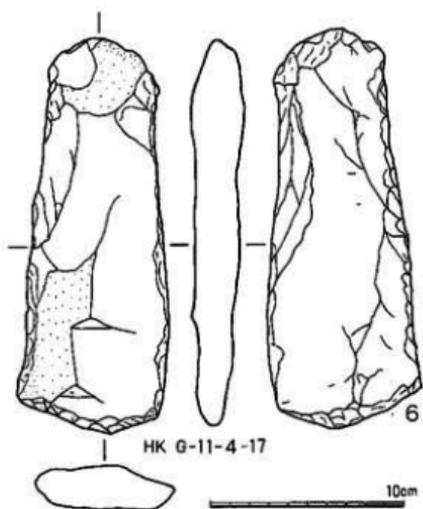
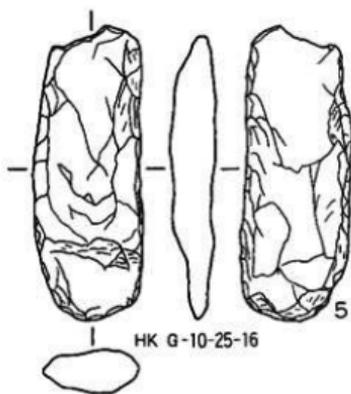
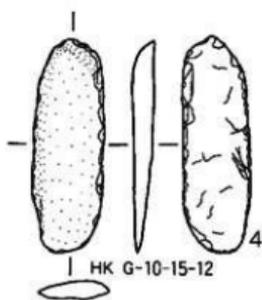
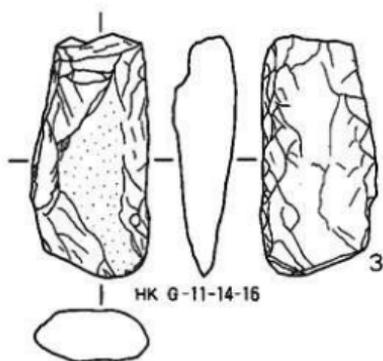
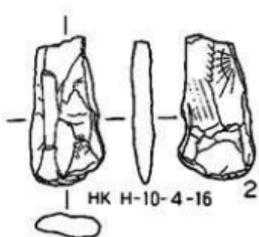
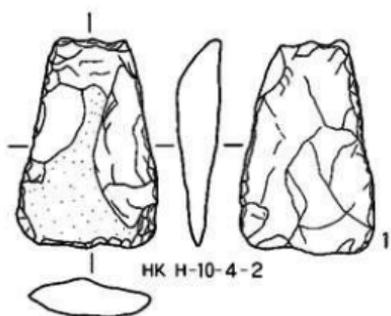
1は筒状の工具で施した条痕文系の土器。2は山形の連続文が横位に施された器面調製の良好な土器で、深町・水遺跡等より類似した遺物が出土している。3～12は器厚が5～7mmと薄手で胎土もよく精選され焼成良好な縄文晩期の条痕文土器である。13は竹管具で交叉状に施文され、器厚も1cmと厚い土器で、縄文後期頃の土器と考えられるもの。14は薄手の調製の良好な縄文晩期の条痕文土器。15は無文の土器で器面に指頭痕の残るやや粗製の縄文後期末の土器。16は胎土に長石粒の多く混入しているやや粗製の条痕文を施した縄文晩期初頭に比定される土器と考えられるもの。

B地区出土遺物拓本（第17図、図版10.11.15.16.17）

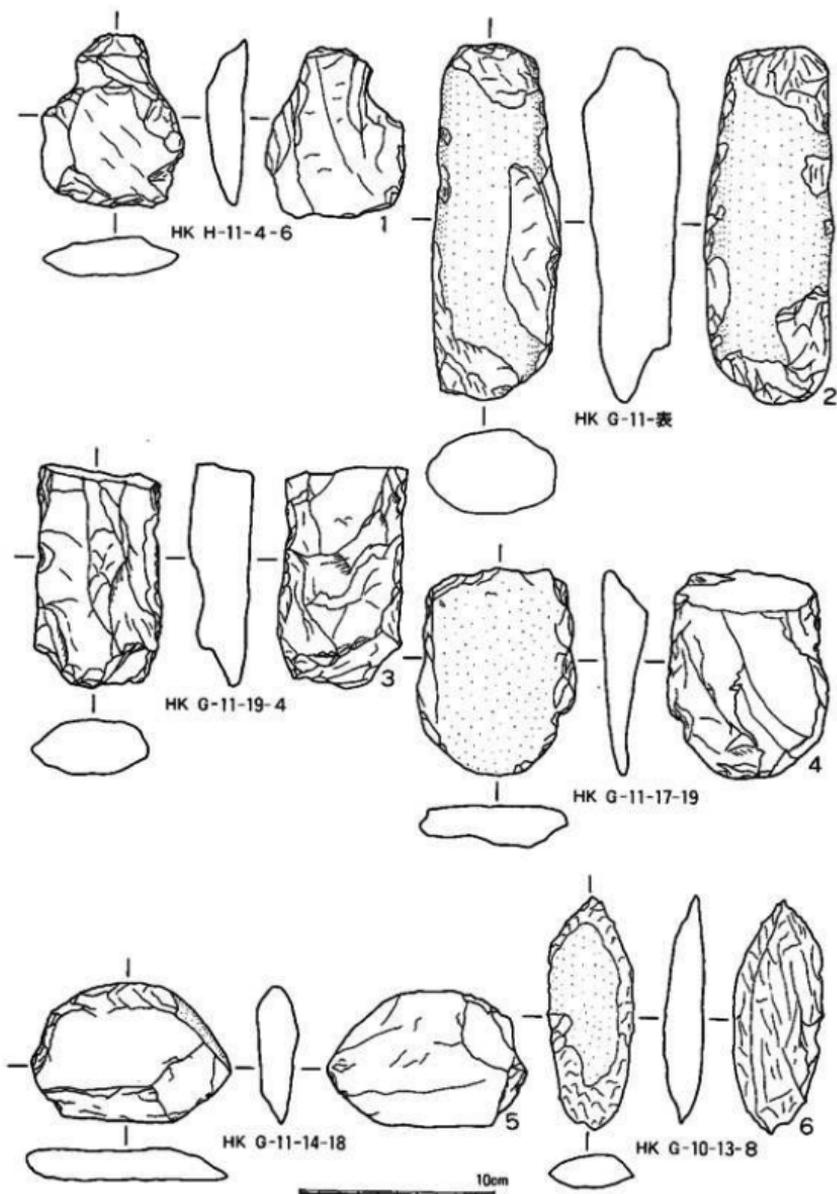
1～9は胎土焼成共良好な土器で、器厚も5～7mmと薄手で条痕文が施された縄文晩期の土器。10、11は細い並行沈線文が施された縄文晩期の土器。12は胴上位に施された浮線網状文土器で、水1式に比定される土器である。13は底部まで条痕が残る網代底の縄文後期後半の底部。14は網代の縄文晩期の底部。15は網代底の縄文後期後半の土器。



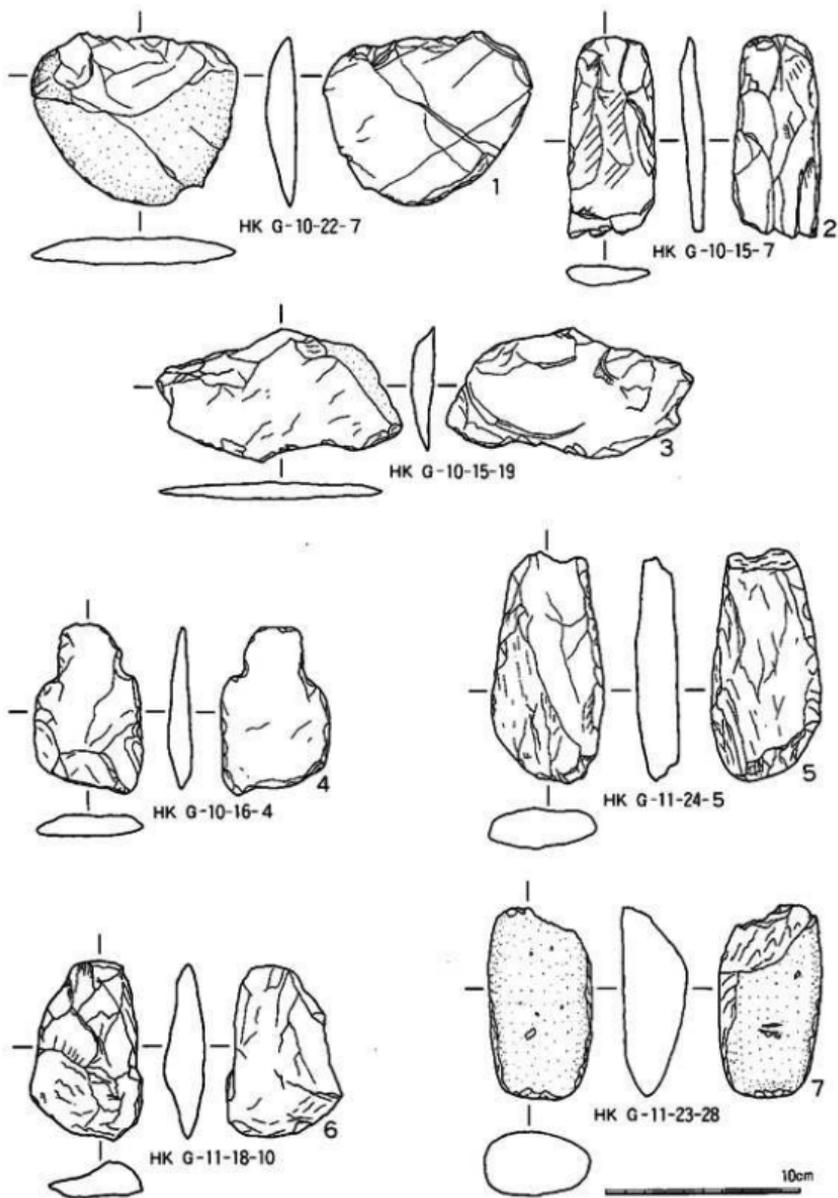
第18图 原勝間遺跡B地区出土石器実測図



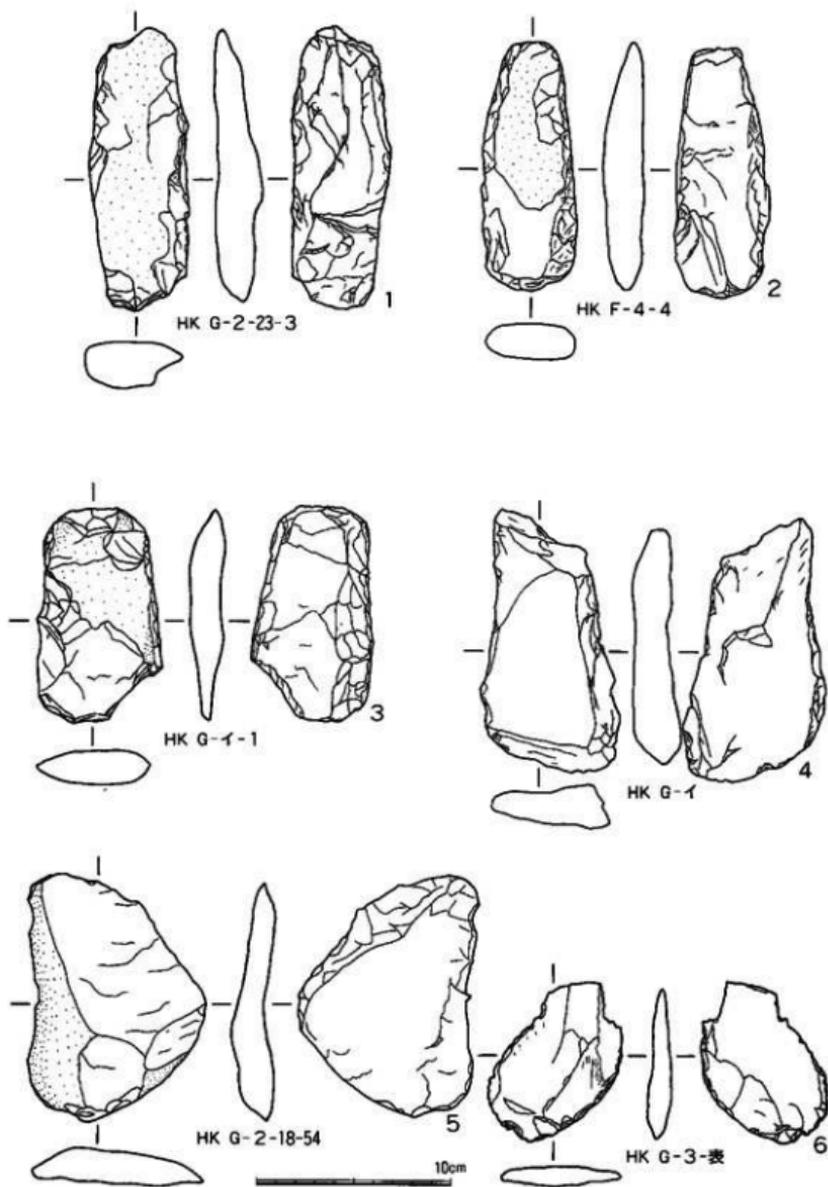
第19圖 原勝間遺跡B地区出土石器実測圖



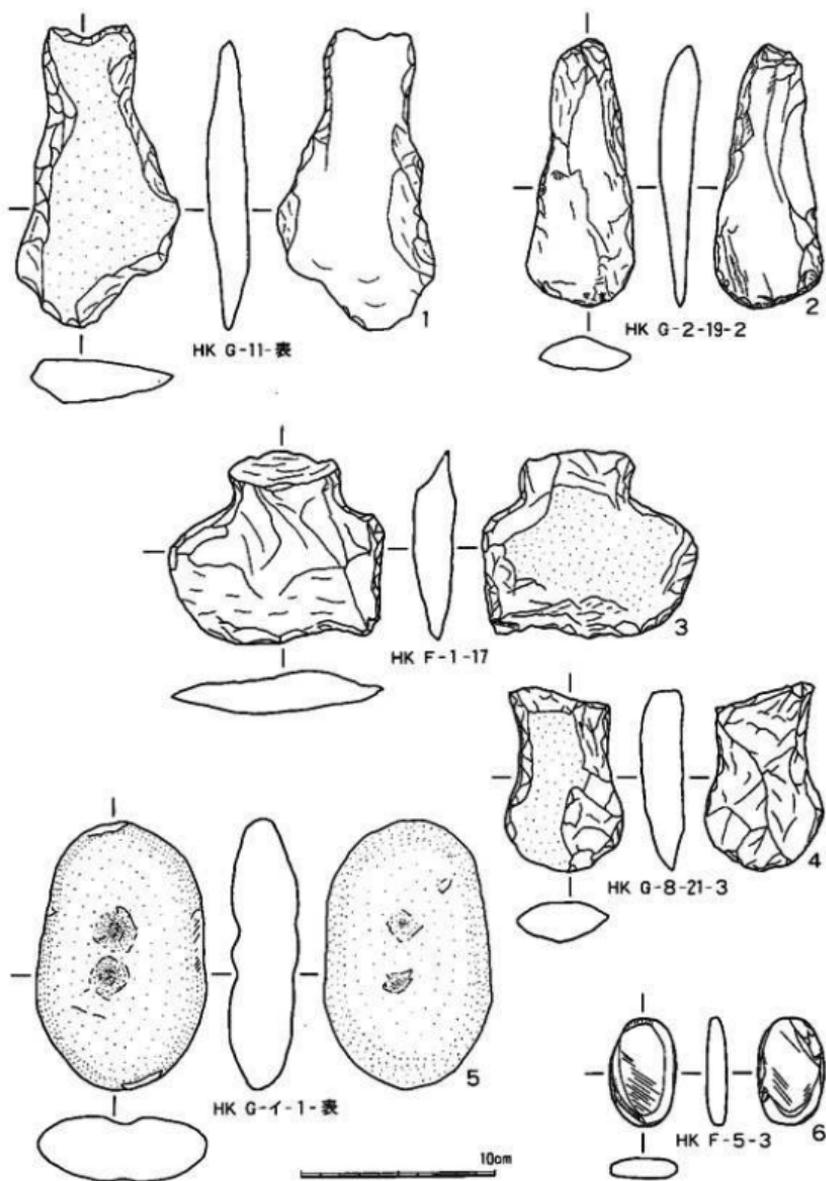
第20圖 原勝間遺跡B地区出土石器実測圖



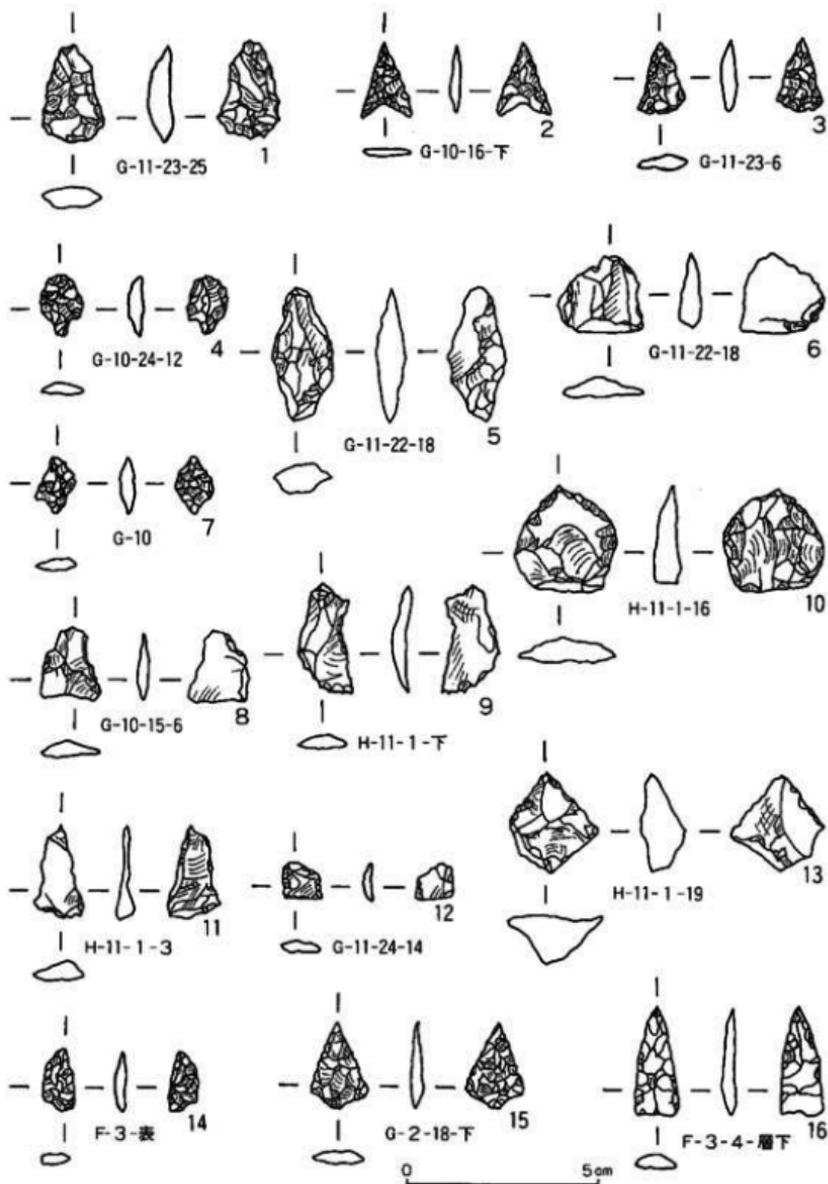
第21图 原勝間遺跡B地区出土石器実測図



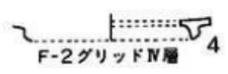
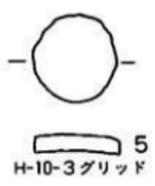
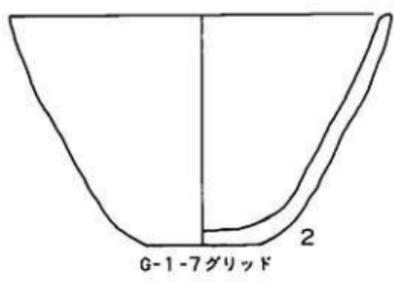
第22圖 原勝間遺跡遺構外出土石器実測圖



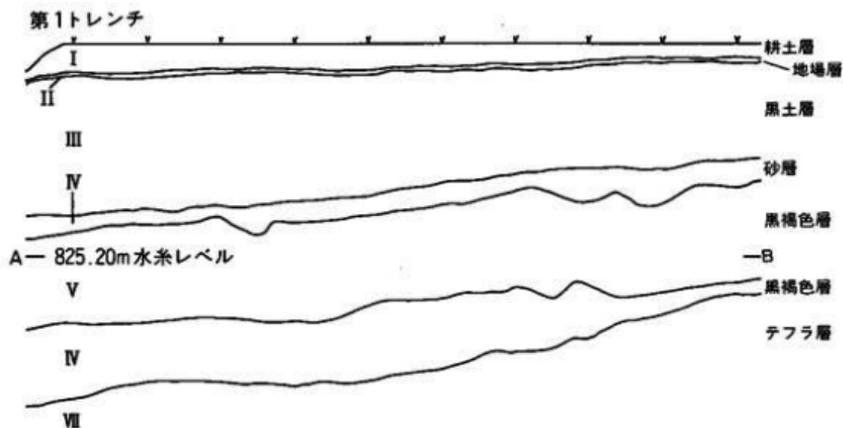
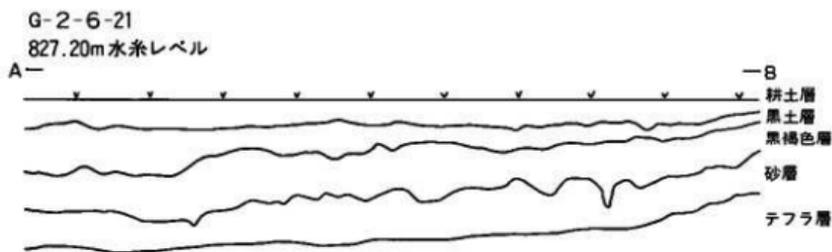
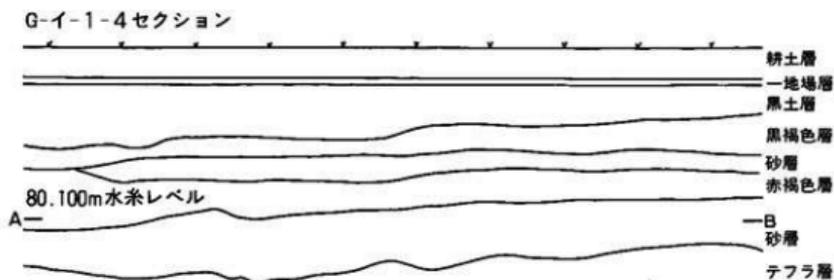
第23図 原勝間遺跡遺構外出土石器実測図



第24图 原勝間遺跡A・B地区内出土石器実測図
(1~13B地区、14~16A地区)



第25図 原勝間遺跡A・B地区内出土土器実測図



第26図 原勝間遺跡A・B地区地層図

遺物、石器（第18～21図、図版11.12.18.20）

遺構の検出が少ないわりには多量に出土した。大半が打製石斧である。材料には硬砂岩が使われており、緑色岩は全体の20%である。小型石器は、黒曜石製で他の材質のものが1点ある。G-10、11、H-10、11のグリッドからは他のグリッドより多く出土した。第18図の1の石器は両側に抉りを作り柄を固定しやすく作製されており、身は厚く重量もあり工具として使えるような石器である。第18図の2は横刃型の石器である。裏面の下半部が磨滅しており長時間使われた石器である。第21図の4は粗製石匙である。第18図の6、第21図の7は磨製石斧の欠損品である。第20図の6は石槍状に作製されており他時期の混入と思われる。

石器（第22・23図、図版19）

遺構外からも図示した石器以外にも多くの破損品が出土している。凹石（第23図の5）は、今回の調査ではこの1点だけである。両面に2箇穴があり軟質の砂岩が使われている。第23図の6は硬質の粘板岩で黒色をしておりよく磨かれている。2ヶ所原石面が磨かれずに残っており、製作途中のものと考えられる。

小型石器（第24図、図版12.19）

1～13は、縄文土器片が多く出土したG-10、11、H-11グリッドからの出土である。1～4.7.8.11.12は石鏃で、5は小型の石匙状のもの、6.9.10.13はスクレーパー、14.15.16はA地区からの出土である。16は頁岩製と考えられ小形体よりみて古い時期の石鏃と思われる。

遺構外出土の土器（第25図の2・3・4・5、図版14）

第25図の2は、G-1の7グリッドから出土した粗製の鉢で、口径19.8cm、高さ12cmあり、無文で底部に網代痕がわずかに残る角は磨滅して角が丸くなっている。3は灰軸皿の高台部分から立上りの部分で猿投産である。4は灰軸皿の高台部分で猿投産である。5はH-10-3の1から出土した土器片製円盤で無文の土器片が使われている。

（木下平八郎）

第 IV 章 まとめ

原勝間遺跡の発掘調査は、高遠町が行なっている団体営土地改良総合整備事業の内の、埋蔵文化財緊急発掘調査である。この調査の性格上報告書は事業年度内に刊行する義務があるところから、資料の検討が十分にできないので、考察については後日にし、今回は実測図及び拓本を中心に報告書を作成することとした。報告書の「まとめ」としては、調査中と整理中に知り得た二、三の問題点について述べ、まとめをしたい。

1. 原勝間の段丘の成立は大別して二時期にわたっている。そのうちの第一時期は今回発掘された面である。この面は東高遠の台地面と、同一時期に成立したと考えられる面である。第二時期は現在の三峰川の段丘面である。この面は小原地区や西高遠面が形成された時期と同じ時期である。

2. 今回調査をおこなった箇所のある南東にある桜の植えられている運動場の面から、P.1が発見された。このP.1は御岳山の噴火の時に堆積した火山灰の一層である。P.1の年代は今から8万年前と言われている、このパミスの発見された所より10m下部から三峰川の礫が検出された。このことは8万年前頃に、この面あたりを三峰川が流れていたことを立証してくれる貴重な資料である。

3. 勝間発見の尖頭器は、大正年代に刊行された「先史及原始時代の上伊那」に写真が掲載されていることにより知り得ることができる。また「上伊那誌」歴史編にも実測図が掲載されているので、この頃までは現存していたことは明らかである。その後行方が不明となっている。尖頭器は柳葉形で、約1万3～4千年前の旧石器である。これだけの優品は上伊那でも数少ない貴重な石器の一つである。

4. 発見された縄文時代の遺物は縄文後期と晩期であるが、調査の区域内からは、この時期にかかわる遺構は検出されなかった。おそらくこのことは調査区域外から流出して来たものであると考えられる。発見された遺構は第1号住居址と第2号住居址の二軒である。そのうち第1号住居址は住居の南半分が一貫水路で切り取られた住居址であるため、カマドや柱穴の半分は失われ、平安時代の住居全体を想定するところまでには至らなかったが、出土遺物から平安時代後期の住居址であることが確認された。第2号住居址は、住居の床面までが古い時期の水田造成時に破壊されていたので、堅穴住居址の壁は確認することが出来なかった。そのため住居址のプランをつかむことはできなかったが、破壊されていた石芯粘土ガマの一部から灰軸陶器が出土し、この灰軸陶器から、平安後期の住居址であることを確認することが出来た。こうしたことから、この附近には多くの平安時代の住居址が存在していたことをうかがうことができた。また、灰軸陶器の蓋の一部が出土した。この灰軸の蓋は古く、おそらく平安時代中頃のものと考えられ、原勝間の平安時代の村の成立は、平安時代の中頃からではないかと考えられる。墨書土器、この土器は「方」と読める墨書で、人の名字か、あるいは、何かの記号であるのかは明らかでないが、とにかくこの地に文字を使うことのできる人が住んでいたことを物語ってくれる貴重な原勝間の文化財である。

5. 原勝間で二、三注目すべき地名がある。小松泰人さんが、今は使われていないが古くは

「葛麻^{くわま}」という文字を使ったことがあると話してくれた。原勝間の小さい扇状地は、麻を栽培するに適した所だということで、古くは「葛麻^{くわま}」と言う文字を使っていたのではないかと思われる。宮田村には平安時代には「御布所^{ごふしよ}」があった。伊那地方の麻の織物を集め京に送っていた所である。麻が栽培出来る所は排水が良く土地が肥えている所でないとい良い麻は生産できないと言われている。勝間は麻の栽培に適した土地であったと思われる。このことは、古代の勝間の生活を知る歴史的な地名ではないかと思われる。

荒墟（あらじょう）などの地名が残っているが、このような地名は、私の知るところでは、古代末～中世初頭頃にかけての地方豪族の居館があった例が多い。上伊那の各所にこの時期の名も無い館城が多く見受けられる。前回発掘された勝間の堀遺跡の濠渠址とされている遺構は中世の館址の堀と考えられるものではなかろうか。

以上を述べてまとめたい。

（友野 良一）

感想文 一発掘作業に参加して一

は場整備事業に伴い、原勝間地区も早くから土器、石器の出土があったという事で思いもよらぬ発掘という事になりました。

地域の事でもあり、私も少しは興味がありましたので発掘作業に参加しました。発掘といいますが、テレビ、新聞、郷土館などを見ただけで、どの様な工程をふむのか知るよしもありませんでした。野の草も少し黄緑色の芽を出し、桜のつぼみも赤みをおびはじめた4月12日に作業が始まりました。最初に団長さんより発掘に対する心得など細部にわたり説明を受け初日の作業に入ったのですが、とにかく素人ばかりで、工事現場にでもいるかの様にただひたすら掘るばかり、一休止と声がかかったその時でした。感動の瞬間、出た……休む手も止めずここにも又、ここにもと、初めて手にする遺物ばかりでした。

みんな集合して先生からの説明を聞く、縄文、弥生の土器や石器、土師器、石鏃と、先生の口調はすらすらと、私共はただひたすら聞き入るばかりでした。変わった遺物が出る度に、使用度とか何時代頃とか説明を受け、自分なりに幾分か遺物に対する知識を得た様な気分になり、時には説明したりして大笑いの一駒もある程でした。

発掘、遺物の位置付け、レベル読み、地層図と、家庭生活では学ぶ事の出来ない良い体験学習であった様に思います。又、普段とちがった面で地域の方とのコミュニケーションも出来、人と人とのつながりも、なお一層強くなりました。

発掘作業が終わった後も、掘り出された新しい土の所に行き、何か遺物はないかと行く度毎に数多くの石器、土器、黒曜石の破片、石鏃などを手にする事が出来ました。家の宝物として大切にしていきたいと思っております。

は場整備事業の賜とでもいまいしょうか、この地に住む古代人の文化、歴史を多少なりとも知り得たという事は、地域にとっても、私自身にしても、大きな収穫でした。

今、生涯学習といわれておりますが、願っても出来ない発掘作業に参加出来ました事は、私にとって本当に良い体験学習と心からよろこんでおります。そして発掘学習の中で得た幾つかの知識、感動は、私と共に生きて行く事と思います。

(小松 節子)

あ と が き

原勝間遺跡発掘調査の経過並びに成果につきましては本文中に記載したとおりであります。この報告書を発刊するにあたり思い返してみますと、この発掘調査期間中を通じて調査団長の友野先生をはじめ調査員の先生方には、毎日が激務であるにもかかわらず休憩時間を利用しては発掘作業員の皆さんと進んで学習会をもっていたり、数回の報告会を実施していただき、こういった調査活動についてはあまり縁のない高遠町ではありますが、歴史調査の大切さ、貴重さを熱意を持って教えていただきました。又、本報告書の執筆にあたりまして各自お忙しい中ご尽力をいただきまして、感謝申し上げる次第であります。

執筆者多忙の中、発掘調査が5月に終了したにもかかわらず、期限一杯の発行となってしまったことは反省させられる一点でありました。

調査期間中数々のご迷惑をおかけしたにもかかわらず、積極的に作業に参加し、興味を持って取り組んでいただきました、地元原勝間地区の皆さんに厚く御礼申し上げます。

高遠町教育委員会

伊 藤 敏 明

参 考 文 献

- | | | |
|--------------|------|-----------------------|
| 上伊那教育会 | 1926 | 「先史及原始時代の上伊那」 |
| 長野県（校訂 栗岩英治） | 1936 | 「長野県町村誌（南信版）」 |
| 上伊那教育会 | 1965 | 「上伊那誌（二巻歴史編）」 |
| 竹入弘元 | 1976 | 「伊那谷の石仏」 |
| 小林達雄 他 | 1977 | 「日本原始美術大系Ⅰ」 |
| 千曲水素古代文化研究会 | 1980 | 「編年」 |
| 長野県史刊行会 | 1981 | 「長野県史（考古資料編）全一卷（三）」 |
| 岡本 勇 | 1981 | 「縄文土器大成 2 中期」 |
| 瀬戸市歴史民俗資料館 | 1982 | 「研究紀要Ⅰ」 |
| 高遠町教育委員会 | 1982 | 「勝間一掘遺跡」 |
| 高遠町誌刊行会 | 1983 | 「高遠町誌（上巻歴史編）」 |
| 瀬戸市歴史民俗資料館 | 1984 | 「研究紀要Ⅲ」 |
| 瀬戸市歴史民俗資料館 | 1986 | 「研究紀要Ⅴ」 |
| 小林達雄 他 | 1988 | 「縄文土器大観 2. 中期Ⅰ」 |
| 小林達雄 他 | 1988 | 「縄文土器大観 3. 中期Ⅱ」 |
| 長野県史刊行会 | 1988 | 「長野県史（考古資料編）南信全一卷（四）」 |
| 高遠町教育委員会 | 1988 | 「高遠の小字名」 |
| 小林達雄 他 | 1989 | 「縄文土器大観 4. 後晩・統縄文」 |

圖 版

図版 1



原勝間遺跡遠景（対岸除組地籍より） 1.調査中 2.事業進行状況

図版2



原腸間遺跡連景（対岸除相地籍より） 3.調査中 4.事業進行状況

図版3



原勝間遺跡調査前の近景（遺跡西側より）

図版 4



1. G-1グリッド調査状況 2. G-10、11グリッド調査状況

図版5

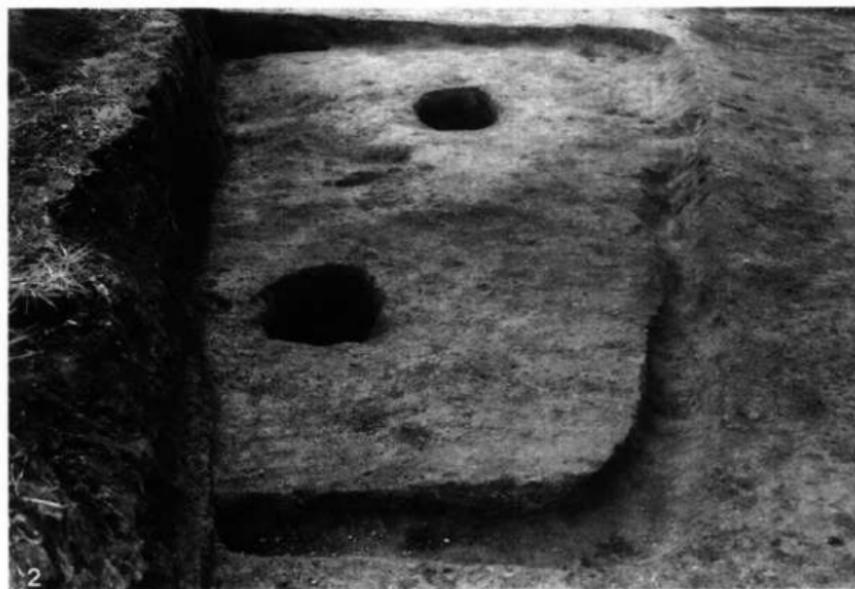


F-1~G-1グリッド西側断面

図版6

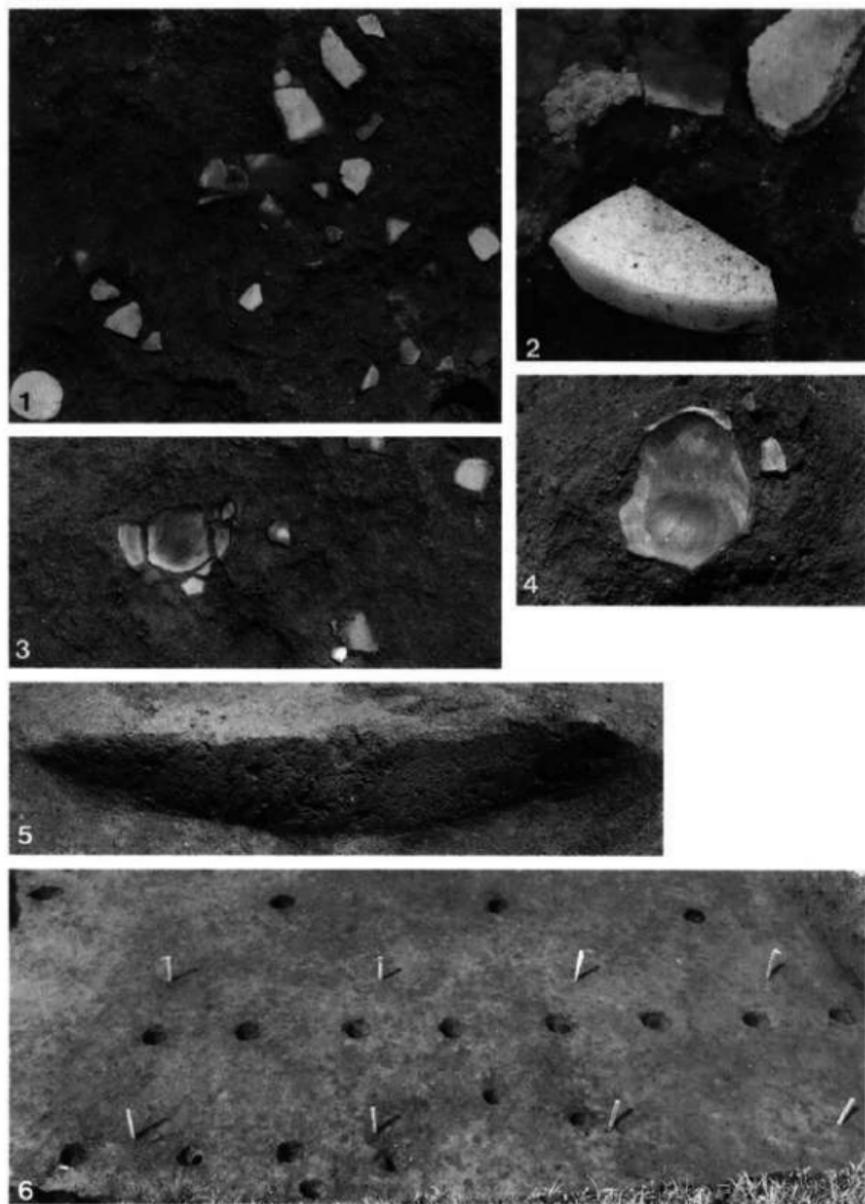


1. F-4グリッド出土状態 2. G-10グリッド柱穴址



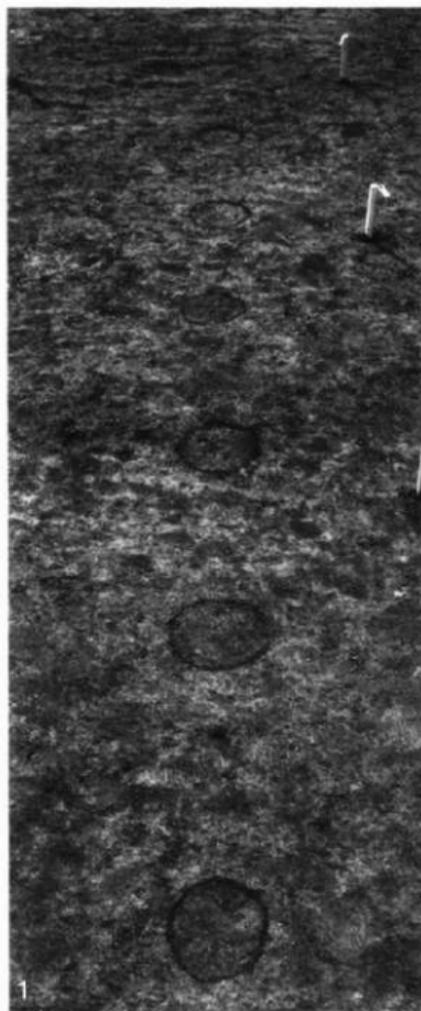
1. 第1号住居址遺物出土状態 2. 第1号住居址

図版8



1～4. 第2号住居址遺物出土状態 5. 第2号住居址カマド火床 6. 第1～3号柱列址

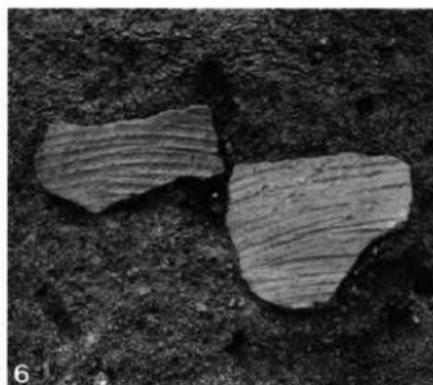
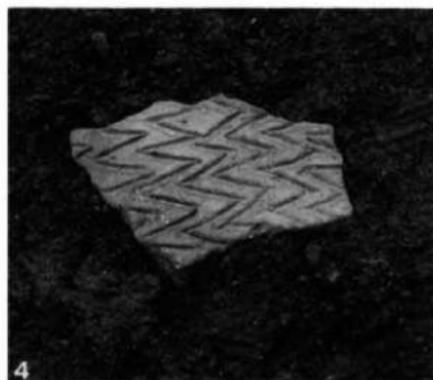
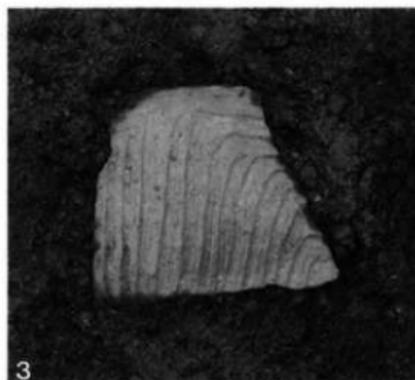
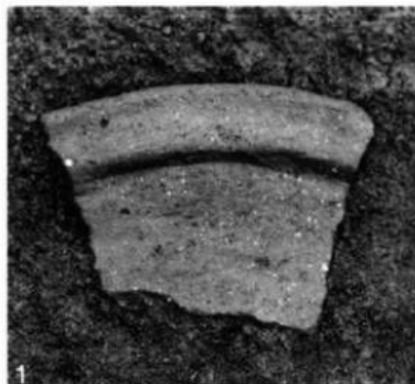
图版 9



1. 第 1 号柱列址出土状态

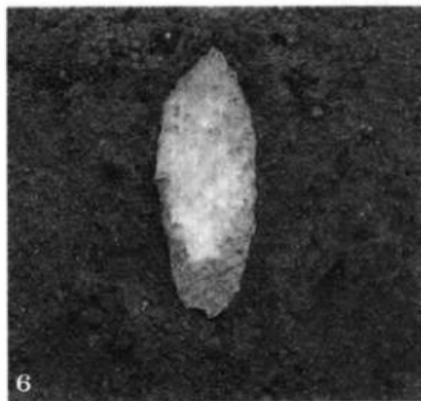
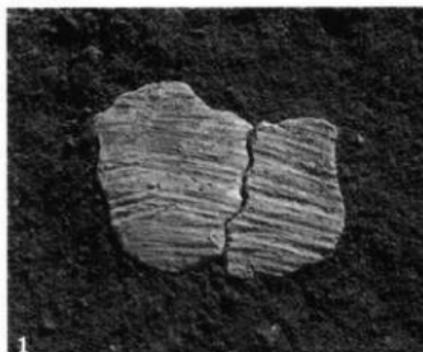


2. 第 1 号柱列址



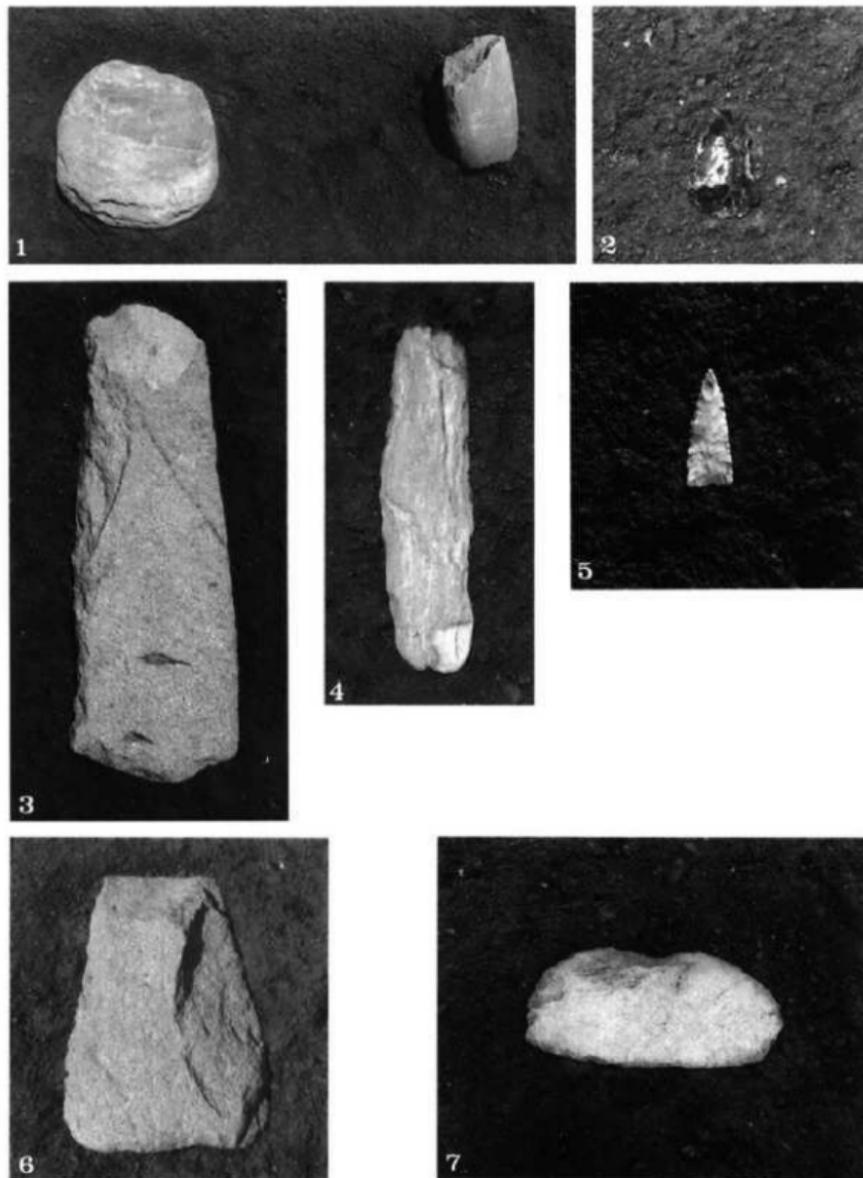
G-10、11グリッド土器出土状態

図版11



1～2. G-11、12グリッド土器出土状態 3～6. G-11、12グリッド石器出土状態

図版12



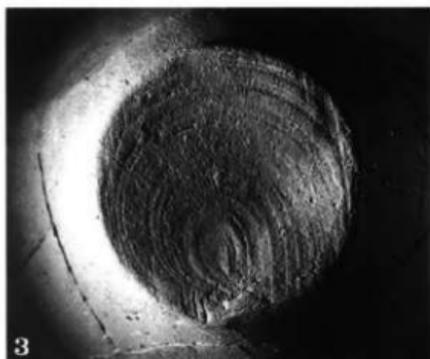
1～4. 6～7. G-11グリッド石器出土状態 5. 遺構外石鏃出土状態



1



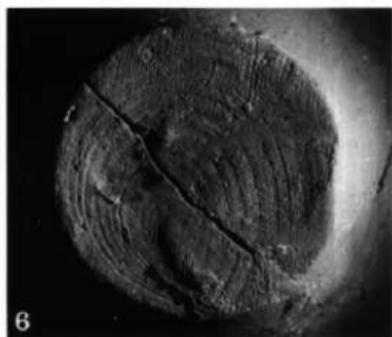
2



3



4



6



5



7

第2号住居址出土遺物



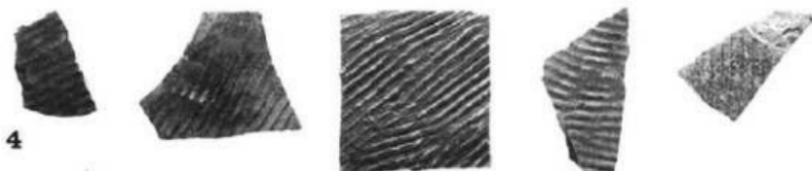
1



2



3



4



5



6

1. 4. 第2号住居址出土土器

2. 3. G-1グリッド出土土器

5. F-1断面出土灰釉陶器

6. 第2号住居址出土葉蓋蓋



1

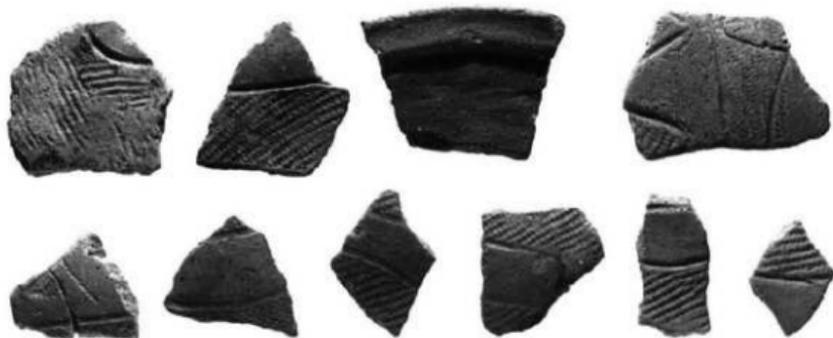


2

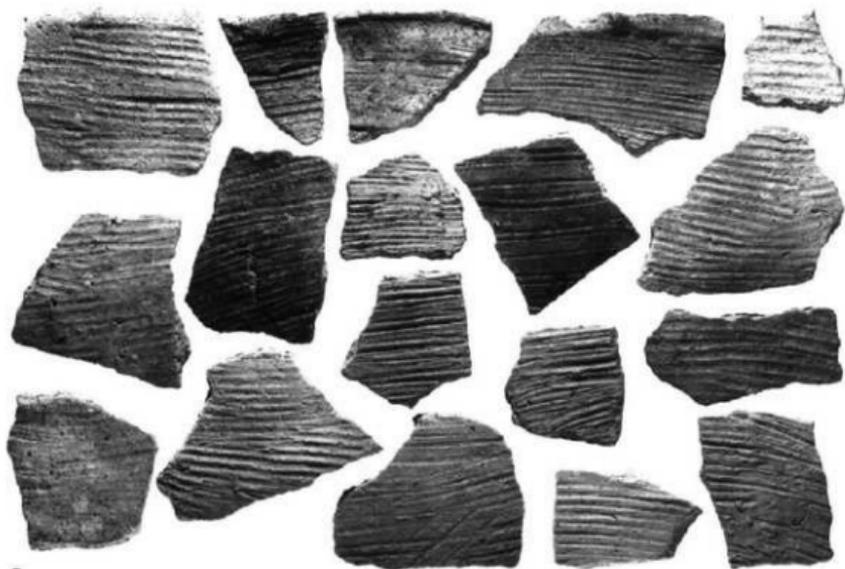


3

1. G-10グリッド出土土器 2.3. G-10、11グリッド出土土器

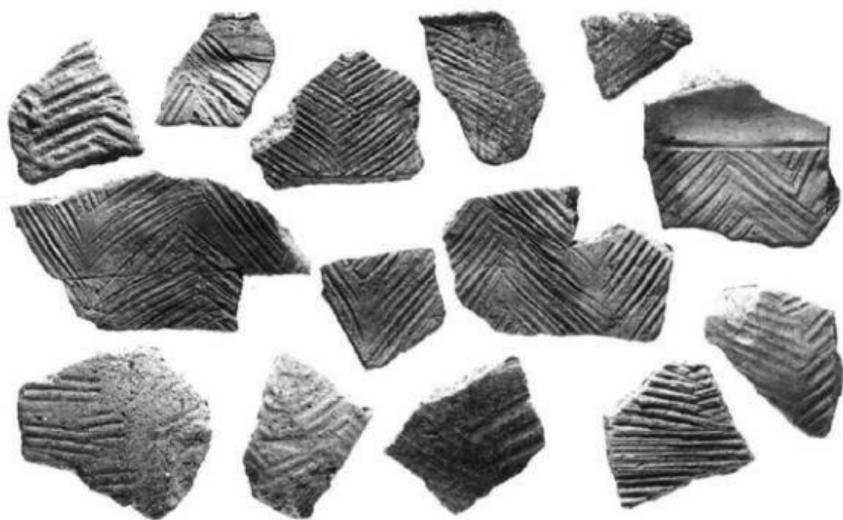


1



2

G-10、11グリッド出土土器

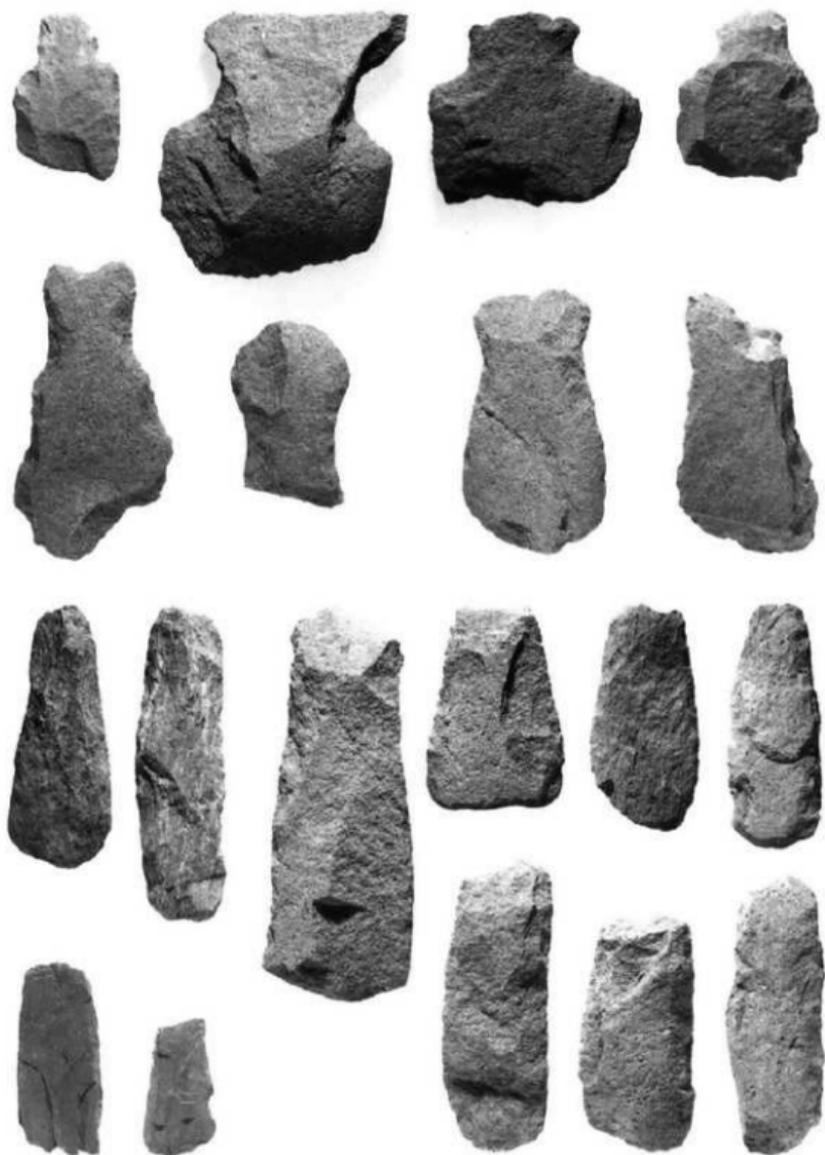


1



2

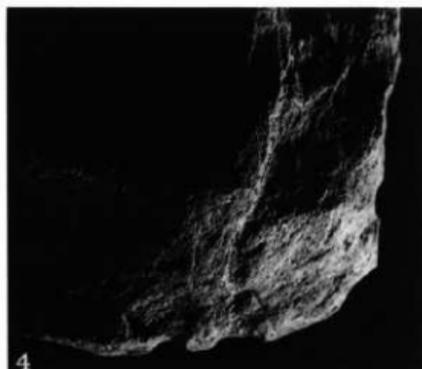
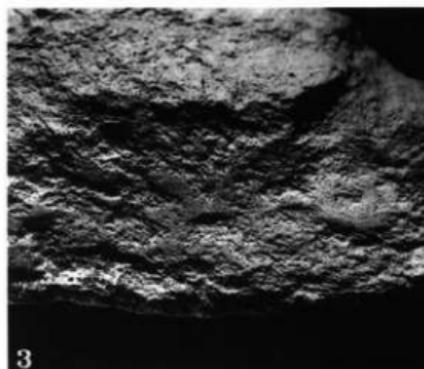
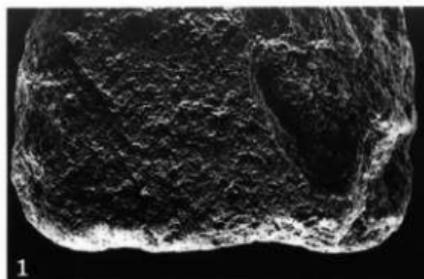
G-10、11グリッド出土土器



G-10、11グリッド出土石器



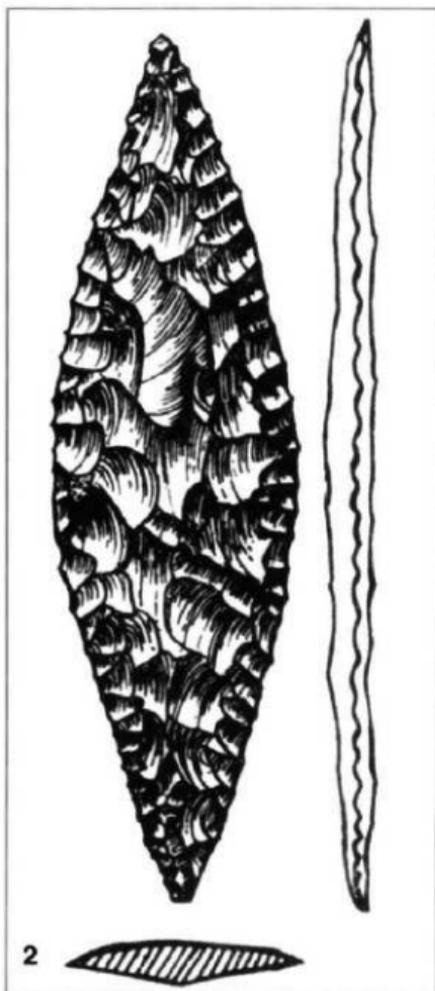
各グリッド出土石器



G-10、11グリッド出土石器（使用痕）



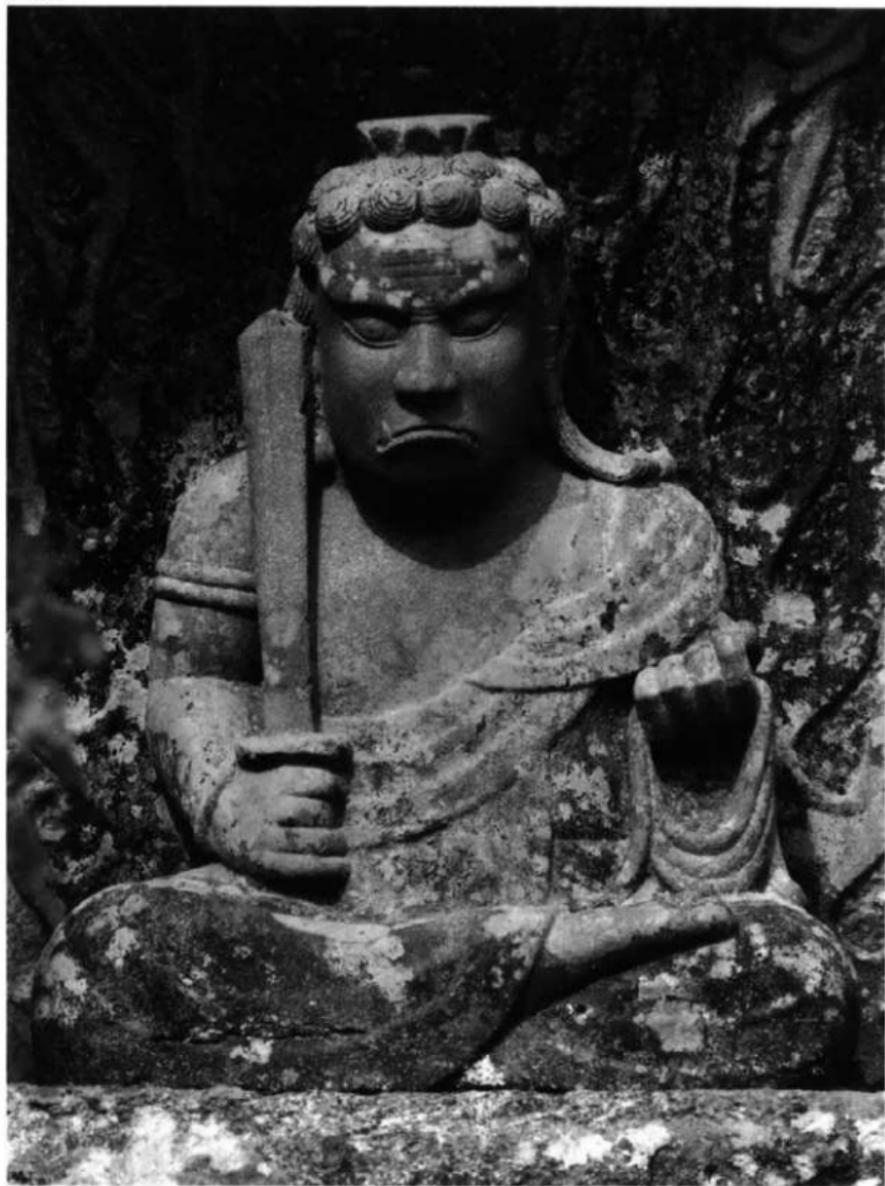
1



2

1. 勝間出土の尖頭器（先史及原始時代の上伊那より）

2. 勝間出土の尖頭器実測図、原寸大（先史及原始時代の上伊那より）



守屋貞治作 大聖不動明王（原勝間常盤橋袂）

高遠町原勝間地区団体営土地改良総合整備事業

(小規模排水対策特別)

原 勝 間 遺 跡

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成2年3月

発行 高遠町教育委員会

印刷 聯才ノウエ印刷

長野県下諏訪町5311-1

